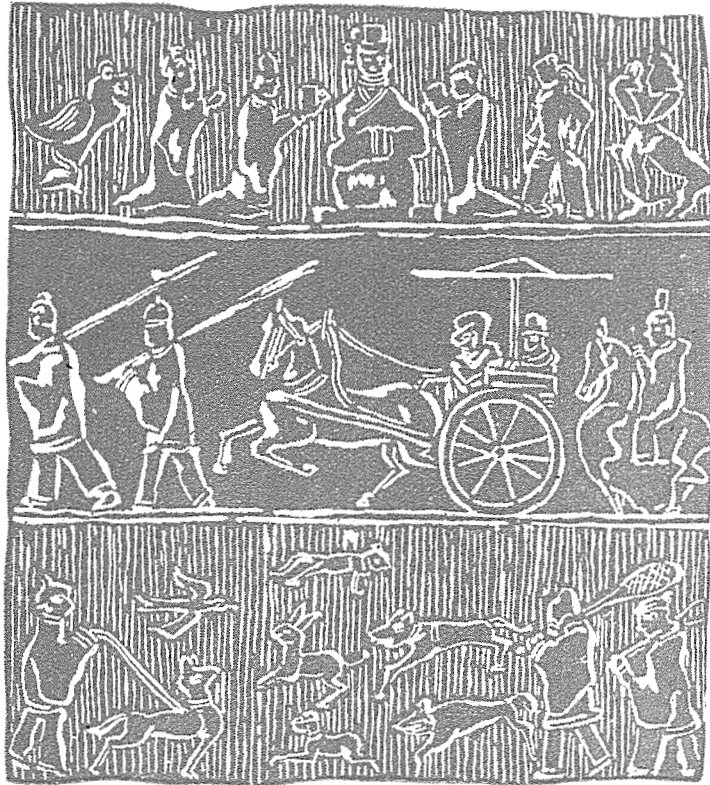


西大學學報

第百六十六號

昭和三十三年六月



關西大學學報發行局

大阪高商教授
大阪商大助教授

松井辰之助著

經營經濟學原論

第一分冊

菊判並製二一二頁

定價壹圓六拾錢

送料 拾四錢

新刊

新興の學問である經營經濟學に關しては、從來諸家の間に種々の論議が行はれ、今尙歸一するところを知らない有様である。本書は素々斯學の性質及び内容の一般に關する總論的敘述を目的とせられたものであるが、勢ひそれ等の論議にも觸れて著者獨自の見解を披瀝してゐられる。

先づ此の第一分冊には、第一篇經營經濟學の基本概念に於ける、經營學の方法總說、經營學的思惟方法の特質、經營經濟學の概念指定に於ける領域、本質學的方法と歴史學的方法、經營經濟學の意義の四章が收められてゐる。

松井教授
近刊

經營經濟學原論 第二分冊

小賣商店經營改善通俗五講

商店街の研究

小賣商問題概論

大阪北區梅田新道
大阪大替振
電話北區
一三五七二番
一五六七二番
一三五七二番

大 同 書 院

東京駿河臺中央大學前
振替東京八一三八番
電話田二二二八番

目次

日本文化の多様性……魚澄惣五郎 (一)
 伊太利雜誌……………德尾 俊彦 (二)
 學 内 報…………… (三)
 日本文化講義——私立大學聯合會——祝賀提灯
 行列——人事移動——かくほう抄——應召軍務公
 用者…………… (三)
 校 友…………… (三)
 大阪支部——福岡支部——大連支部——新京支部
 富山在任校友矢野知事歡迎會——動靜——住所
 移動…………… (三)
 學會消息…………… (七)
 千里山經濟學會——商業研究會——國語漢文學
 會——東亞研究會…………… (七)
 修學旅行の記…………… (八)
 大學豫科——專門部第一部…………… (八)
 學 友…………… (九)
 基督教青年會——關西大學ウリ學友會——一部
 辯論部…………… (九)
 關大スポーツ…………… (一〇)
 野球——陸上競技——ホッケー——水上競技——庭
 球——米式蹴球——籠球——卓球——射擊——相撲——
 二部剣道——一部自動車——一部弓道——千里山
 弓道——千里山馬術…………… (一〇)
 校友會會費拂込者氏名…………… (三一)

日本文化の多様性

講師 魚澄惣五郎

本稿は本學豫科並に專門部第一部第二部の日本文化講義に於ける講演速記である。

今日お話し申すのは先程御紹介になりました通り日本文化の多様性といふのでありまして、日本文化にはいろ／＼な各種の要素、つまりエレメントが含まれてをるのであります。そのいろ／＼な要素がどういふやうに歴史の上に現はれてをるか、またそれらの要素を吾々の祖先が如何に受け入れて、さうしてそれを發展せしめて來たかといふ點に就いて申し上げたいと思ふのであります。

日本文化の多様性といふのは、言葉を變へて申しますれば文化の變化性であります。これを英語で申しますればバリエーといふことに相當致すのであります。多種多様の文化が二千五百有餘年の歴史の上に現はれてをるので、それらはいろ／＼な方面から考へることが出来るのであります。先づ最初に日本民族といふものが如何にして出來上つてをるか、即ち我が國家を形成してをるところの日本民族といふものはどういふ具合に各種の民族が結合したものであるかといふことを申し上げて見ようと思ひます。それには第一に考古學であります。遺蹟によつて日本古代の有様を調べますところの——この考古學によつて考へて見ますと日本民族の祖先には二様の文化要素がある、即ち二種

類のエレメントがあるやうに考へられるのであります。これを専門的な言葉で申しますと第一は彌生式土器を用ひてをつた民族であり、もう一つは縄紋式の土器を用ひてをつた民族であります。この二つの民族が我々の民族の祖先の二つの要素をなしてをり、然も二つのものは相異なる文化を持つてをつたと思はれるのであります。この二つの土器はそれ／＼の土器の形、色合ひ、その他地中から發掘されたいろ／＼な壺、或ひは瓶、瓦器、さういふやうなものに表現されてをります。所謂表現の方法でありまして、その相異なる方法によつて彌生式、縄紋式に區別されてをるのであります。彌生式土器といふのは茶褐色を致しまして、大體その表面に模様の着いてゐないのが普通であります。縄紋式土器は薄黒色をしてをり、模様には繩、席などを表し、粘土の表面を抑へつけてゐるやうな模様の着いてゐる土器を申すのであります。甚だ専門的ですがこの二種の土器が日本全國到處に出るのであります。我々の見るところではどうも同一民族の用ひてをつたものとは考へられないのであります。或る人はこの縄紋式土器を指してアイヌ式土器と申してをります。従つて縄紋式土器を用ひてをつた民族はアイヌ人であら

うと申してをるのであります。

これらの土器は九州の南端から北は陸奥、北海道に到る處に出るのでありますけれども、大體彌生式のものには近畿地方を中心として西の方に澤山出るのであります。斯様に二つの文化要素があるといふことが地下から發掘される土器によつても分るのであります。

これを更らに人類學の上から眺めて見ますと、大和民族といふものは世界の何れの人種に屬するものであるかといふことが考へられるのであります。これは非常にむづかしい問題であります。或る人は南洋系統のものが非常に濃厚であると言ひ、又或る人は北亞細亞の系統が多い、或は支那本部の方の移住民が多いと言ひ、いやそうではない、日本本來の先住してをつた人種が中心である、或は朝鮮半島から來た人種が多い、アイヌ系統が多いといふやうに人類學の上からいろいろの持論を申してをるのであります。それは骨格の研究なりその他いろいろの研究の結果から言はれるのであります。兎に角學問的には今日の大和民族といふものは亞細亞人種に屬してをる、これを大きく申せばモンゴロ種に屬してをるといふことが考へられますけれども、然もそれが非常に少ないのであります。どの民族に近いものであるかといふことは分らないのであります。要するにいろいろの要素が交り合つてをるのではないかと思はれるのであります。單にそれのみでなく歴史がはつきり致しましてから、いろいろな書物が出るやうになり、古事記、日本書紀といふやうな書物が出るやうになつてから後、それらの書物の中に現はれてをる記事から觀察致して見ますと、當時は朝鮮半島、或ひは支那方面から澤山な移住民が

日本に來てをるのであります。それらの移住民は殆んど集團移民であるといふことが文獻の上でもはつきり申すことが出来るのであります。例へば欽明天皇の御代に朝鮮半島から參りました歸化民族の如きは一度に二千、三千といふ多數のものが日本に移住して來てをるのであります。さうしてそれらの民族が度々參つてをり、北は下總、武藏といふ關東地方を始めと致しまして、近畿地方に於ては河内、和泉、攝津、山城といふ附近に夥しく歸化人が入つてをつたやうであります。これは文獻の上では極めて明確に出てをるのであります。平安朝、奈良朝頃の書物によつて見ますと大和の國でも特に高市郡といふ郡の如きは約八十パーセント乃至九十パーセントといふものが大陸から來た歸化民族であるといふことが記されてをるのであります。のみならず山城地方を中心と致しまする萬野郡の地方も亦支那民族の移住が行はれたところであり、それは主として支那の山東半島の方面から來たものであります。これを普通「秦氏」と申してをります。これが秦の一族であります。又「畑」も同じであります。小畑といふ姓もあります。これも同じだと思ひます。兎に角山東半島方面から澤山の移住民が來てをるのであります。大阪府の三島郡、豊能郡地方が特に多いのであります。これらを一々申上げますと際限がありません。兎に角各種各様の民族が日本に來て居つたといふことが考へられるのであります。斯様にいろいろの民族が集つたにも拘らず、我々の祖先の人達は同一血の集團としての強い意識を持つてをり、一つの日本民族としての固い集團的な結合を遂げて國民として、また血族としての同じ祖先を有するものであるといふ

固い信念を持つて貫いて來てをるのであります。勿論それは後に申しますけれども、我が大和民族の中心になるところのものは即ち我々の戴いてをります皇室を中心と致しまして、それに總てが結合しさうして一つの強固なる大和民族としての結合が出来上つてをるのであります。それが今日まで續いてをるのであります。日本民族が人種的にも非常に優秀であるといふのはそれらの各種各様の民族が交はり合つてをるといふことが、言換へれば單一でないといふことが民族としてのいろいろの要素を含ましまして、即ち體質の上から考へても北方に於ける寒い地方の生活にも耐え得る素質を持つてをるのみならず、又南方の赤道直下に於ける生活にも耐え得る素質を持つてをるといふことは、これが日本民族が多種多様の要素によつて皇室を中心として築き上げられてをるからではなからうかと考へられるのであります。

一部のヨーロッパ人は、今日のやうに立派な國家を造り上げた日本人種の優秀さに驚きまして、日本人にはヨーロッパ人の血が交つてゐる、さうでなければあれ程になる筈がないと申してをるのであります。それはどうか分りませんが兎に角日本民族には一つの本流がある、その本流に向つていろいろの要素が流れ込んでをるといふことが言へるのであります。この本流とは申すまでもなく皇室を中心とするところの一つのものであります。流れ込んで來た諸要素のいゝ部分だけを吸収しさうして新しいものを生み出して來てをるのであります。たゞ漫然と交り合つただけでなく、常に新しいものを生み出して來てをるのであります。従つて日本民族の起源といふものはその起源の如何に拘

らず我々の大和民族といふ自覺を持つてをるのであります。それは歴史的に、長い間に我々の祖先がさういふやうな一つの信仰、信念といふものを持ち貫いて新しい大和民族といふものを拵へ上げて来たのであります。それらのことは人種的或ひは民族方面から考へたのでありますけれども、更らにこれを思想、信仰、宗教といふ方面から考へて見ましたならば、日本人、即ち我々の祖先の人達にはその始めに於て民族固有の信仰と申しますか、日本民族の始めから持つてをつたところの一つの思想、信仰といふものがあつたのであります。それに就てはいろいろな方面から考へられるのであります。その中でも最も著しいものは神祇に關する敬神崇祖の考へであります。神を敬ひ祖先を崇ふといふこの思想が古くから民族的にあつたのであります。さうして歴史がはつきり致すやうになりましてから段々いろいろな變つた信仰、宗教が入つて參るやうになつたのであります。

元來日本民族といふものはいろいろな點から、古代の文獻の上から考へて見ますと、非常に素朴な單純なさうして樂天的と申しますか天眞爛漫な現世的な、現世を樂しむといふ傾向が強かつたかの如く思はれるのであります。御承知の如く欽明天皇の時に、思ひもよらぬ佛教といふものが日本に入つて来たのであります。が、佛教といふものは當時の日本人にとりましては全く夢にも知らなかつた一つの人生觀であります。過去現在、未來といふ三世を立て、さうして因果應報の理を説くやうな考へ方といふものは當時の日本人としては且つて考へなかつたところのものであります。これらの信仰が參りました時には國內に於ても相當動搖

が起りまして、御承知の如く蘇我氏、物部氏が佛教を信じやうといふ側と、いや信すべからずといふ側に分れまして争ひを起したのであります。併し結局佛教を信するやうになつて、佛教といふものゝ本質は非常に世界的な宗教であります。若し佛教そのものがそのまゝ擴がつてをり、そのまゝ政治に現はれたとするならば非常な變化を來たしてをるであらうと思ひますけれども、その世界的の大きな世界觀を持つてをる宗教が日本に入ると間もなく國家的宗教となつたのであります。そのみならず國家的色彩の濃厚なものに變つてしまつたのであります。これは後に申したいと思ひますが、日本民族の獨創力と申しますか、日本民族は新しいものを造り出す力を持つてをる。併し人によりますと、日本人は世の中のものは何んでも眞似をしてをる。支那の眞似をする、印度の眞似をする、佛教或ひはキリスト教の眞似をする、日本の文明、日本の發明、發見何んでも彼でも皆眞似ぢやないか、何を發明したのか、人力車位のものぢやないか、斯ういふことを言ひますけれども、一體文化といふものは各民族が發達した文化の向上によりますけれども、模倣でないものはなく大抵のものは眞似るのであつて、たゞ眞似るだけであつたならば猿が冠被ると同じことであります。併しそれを採り入れて自から新しいものを生み出すといふ力がなければならぬ。兎に角日本民族は他のものを採り入れたのでありまして、よく日本民族は抱擁力が強い、何んでも彼でも、謂は佛教でもキリスト教でも、又儒教でも採り入れる、抱擁力とは風呂敷のやうなものだ、斯う言ひますけれどもたゞ採り入れるだけでは何の役にも立ちません。學校に於ても如何

にもよく講義を覺えて居るが、併し覺えてをるだけでは駄目でありまして、その覺えたものを自分のものとしてそれを生かして行くといふところに價値が認められるのであります。日本民族は總て外國のものをドン輸入致しますけれども必ずそれを自分のものに仕上げてしまふ。佛教は印度に起り、支那、朝鮮半島を経て我國に傳つたのでありますけれども、それが日本に來た時には既に日本の佛教になつてをるのであります。印度の佛教でもない、支那の佛教でも、朝鮮の佛教でもない、純然たる日本佛教に變つてをるのであります。佛教を大變御信仰になりました聖德太子は法華教を御講義になります始めに、その御本に聖德太子御自ら御書きになつたと思はれますところのものが残つてをります。それは「法華教を講義する本を海の彼方の本に非らず、日本の本ぢや」といふことが書かれてあります。法華教といふものは印度から支那に傳つて漢文に翻譯されて日本に傳つたのであります。聖德太子がそれを御講義なされる時には日本の法華教になつてしまつてをるのであります。その點が非常に日本民族の有難い、また大切な點でありまして、佛教は先程申しましたやうに非常に世界的な性質を持つてをりますけれども、一端日本に入りますと佛教そのものが護國鎮護の佛様であるといふ、さういふ考への下に佛様を信仰するやうになつてしまつてをるのであります。即ち國家意識といふものが佛教によつて強く現はれてをるのであります。それは聖武天皇の天平十三年に日本全國に六十ヶ所も國分寺——委しく申せば四天王護國の寺と申します——が建てられました。それより先に聖德太子が大坂に建立されたのがやはり四天王寺

で、護國の寺であります。聖德太子が大坂灣頭の浪津に四天王寺といふ壯大な伽藍をお建立になつたのは極樂往生を願ふために、淨土を念ずるためにお建てになつたのではなく、それは國家を護るといふ意味の下にお建立になつたのであります。即ち浪津は當時外國文化の入口でありまして、大陸の人々、殊に朝鮮半島、支那方面から絶えず使ひが來て往來が行はれてをります。その入口に向つて四天王寺を建てられたのであります。それは國を護る佛様であるといふことを表現されたのであります。當時支那は隋によつて統一され、その勢ひは隆々として盛んであります。その力は正に東海の日本にまで壓力を加へやうとしてをります。支那大陸の壓力に對して日本は嚴然たる姿を示すべく四天王寺を建立されたのであります。こゝに至つて佛教の本質といふものが餘程日本的に改まつて來たのであります。

只今では四天王寺にお詣りする人は春のお彼岸か、秋のお彼岸に極樂往生を願ふ人が普通であります。之は段々とその信仰状態が變つて參つたためでありますが、四天王寺は只今申上げましたやうに鎮護國家といふ愛國的なものであります。それが平安朝時代になりましていろ／＼な政治的、社會的の文化に伴ひまして四天王寺の信仰に於ても變化を遂げて來たのであります。それは聖德太子の建てられた護國の寺の意味が變り、夕陽ヶ丘の上に立つて彼岸の日に西の彼方を眺めますれば、入り陽が正に西に沈まんとするその入り陽を見て、向ふに極樂淨土があるといふことを固く念じまして、さうして極樂往生をお念佛致すやうになつたのであります。これは聖德太子が非常に偉大なお方

であつたがために佛教徒の方に於ては、聖德太子は觀世音菩薩が人間の苦しみを救ふために現はれて來られた觀世音菩薩の化身であつて、日本の國土に菩薩が假りの姿に變へて聖德太子となつて現はれてお出でになつたのであるといふ人も出て來ました。従つて四天王寺は聖德太子が建てられた寺でありますから、四天王寺にお詣りすれば觀世音菩薩、即ち聖德太子は菩薩の再現であらせられるから、觀世音菩薩にお詣りするこゝとなる、だから觀音信仰といふことは西國淨土、極樂往生の信仰といふことになりまして。さういふ様に變化してをるところに日本文化のバイテーターがあるのであります。これがまた後に申上げますが、斯ういふやうにいろ／＼と佛教の信仰の上に於てもその國家的な非常に強い意識に燃えて立つやうな佛教でありましてこれが平安朝の藤原氏の時代に入つて來ますと儂い人生觀、つまり此世は儂ない世の中である、早く西方の淨土に行きたい、斯ういふやうに變つて來た。一時、政治、社會の状態から變つて參りまして、日本人の生活、性情が非常に感情生活といふものを重んずるやうになり、感情生活の出來ないもの、即ち月の傾くのを見て涙を流し、花の散るのを眺めては涙を流すといふさういふやうな感情、ものゝ哀れを絶えず感ずるといふことを非常に尊ぶところの藤原時代に入つて來るのであります。それらに伴ふて信仰状態もさういふ風に變つて參りました。それは政治にも關係がございますが、さういふやうになつて藤原時代に於て非常に詩的生活、美的生活と申しますか、兎に角感情といふものを尊び、平安朝時代の文化を見ますと、ものゝ哀れといふものを主觀にしてをる、男女が戀愛を感ずるとい

ふことを主觀としていろ／＼なものが説かれてをります。さういふ風な時代に變つて來ますと、一時は非常に國家的であつた佛教が今度は申すまでもなく、儂ない哀れな夢のやうな世の中であるといふやうに人生觀が變つて來たのであります。ところが次ぎの鎌倉時代に入りまして國家的な色彩の強いものに變つて來てをります。例へて申しますれば日蓮上人の主張するが如き、禪宗のやうな非常に國家的色彩の濃厚なものが現はれてをるのであります。同時に武士生活といふものと關聯して考へなければならなくなり、その感情を重んじ、ものゝ哀れを感じ、又花の散るのを見て涙を流すといふ心持、或ひは月の傾くのを見て涙を流すといふ心持が經過致しまして、武士の時代に入つて來ますと、即ち意志を尊ぶ意志中心の時代に入つて來ますと、感情生活を經過致しましたものが、今度は感情生活を否定するところの意志生活即ち武士的生活になり、質實剛健を中心とし勇氣武勇を重んじ、命を捨てることを尊ぶ武士生活に入つて參ります。併し日本の武士といふものはものゝ哀れを感じ、花の散るのを見て歌を詠ふといふ、その雅びた心持といふものをよく現はしてをります。平安朝時代の感情生活といふものを祖先の人は經過して、武士生活に入つて參りましたから、武士生活の中にもそれらが含まれてをるのであります。勇敢な強い丈夫の中にも儂しい一面のあるといふことは、平安朝時代の感情生活を経て來たお蔭であります。特に武士は禪宗の信仰といふものと關係が深いのであります。北條時宗に致しまして、蒙古來襲の時にあれだけ大きな偉業を爲し遂げたといふことは、何れも禪宗の信仰といふものが可成り影響して

るたやうに考へられるのであります。禪宗といふものゝ性質を考へて見ますと、日本に禪宗の入りました時は鎌倉時代の頼朝の前後であります。支那では宋の時代でありまして、その當時支那には強い外敵が現はれまして、支那本部及びその周圍に強い北狄が現はれまして本國を侵略しやうとして押しかけて來た時代であります。そこで宋の人は何んとかしてこの外敵を防がなければならぬといふところから、この宋の時代には國家を愛する或ひは天子を救ふ、さういふものを中心として國家を擁護しなければならぬ、そこで外敵といふ野蠻人に對して強い團結を遂げなければならぬといふ、さういふ政治的の事情があつたのであります。その間に於て發達しましたところの禪宗であります。故に當時に於て文天祥といふ人が出て來てをります。さういふ時代に起つた禪宗でありますから、禪宗には非常に愛國的な思想があるのであります、特に大義名分といふことを非常に喧ましく説くのであります。禪宗の大義名分の中には當時支那の儒學の方面では、禪宗と伴ひまして朱子學といふものが禪宗に結びついてをるのであります。だから朱子學といふものは儒教の一つの流れでありまして、儒教が日本に入りましたのは文献の上では應神天皇の御代であります。論語と千字文といふものが日本に傳つた時を始めと致してをります。その時期に就ては別問題と致しまして、兎に角早くから入つて來てをりますけれども、儒教が實際に日本に於て社會的に活躍し始めて來ましたのは鎌倉時代以後のことです。その最も強く現はれて來ましたのは江戸時代でありまして、儒教といふものも日本に入りましてからは日本的な儒教になつてし

まつたのであります。これは朱子學に書いてあります。が孔子或ひは孟子によつて始められた儒教といふものが日本に於ては純乎たる日本儒學、日本儒教といふものに變つてしまふのであります。儒教が日本に與へた感化、影響といふものは非常に著しいものがあります。支那に於ては兎に角文化が日本よりも一段と早く進んでをりまして、我國に今日ある文字は全て支那の文字であります。例へば日本人の最も重んずる、最も大切に考へてをるところの「忠義」とか「孝行」といふ忠及び孝といふ文字は皆支那の文字であり皆であります。日本人は支那人から忠といふ文字を教へてもらつた、忠義をするといふこと或るひは孝行するといふことを始めて支那人に教へてもらつたのであるが、若し日本人にさういふ心があれば忠なり、孝といふことを日本語で現はす言葉があるべき筈ではないか、然るに日本には何等のさういふ言葉がない、支那から忠孝といふことを教へてもらつて始めて日本人がさういふことをしなければならぬのかといふことを知つた。斯ういふことを考へてをる人があるかも知れない。しかし忠と言ひ、孝といふことは、これは日本人は早くから血族集團といふものを守つて固つてをる、のみならず親に孝行、君に忠義といふ忠孝一本といふ思想がありまして、君には忠義を盡し、親には孝行をするといふことを實行してをつたのであります。その實行してをつたところの忠といふ言葉は教へてもらつた言葉で、今までやつてをつたことが忠であり、孝であつたといふことを知つたやうな譯であります。即ち字は教へてもらつたが、行ひは既にあつたのであります。實行はしてをつたが文字がなかつたため、佛教が入つた時は

日本には蘇我氏、物部氏、中臣氏の間いろ／＼争ひが起り、佛教を入れるべきや否やに就ていろ／＼争ひが起りましたけれども、儒教が入つた時にはこれに就て政治上の争ひといふものはありませんでした、思想上の混亂といふものは來たしてをらなかつたのであります。歴史の上では政治上、思想上の混亂を來たしてないといふことは、これは前からある思想であります。日本人には既に行はれてをることで、それを支那人に何んといふのかといふことを教へてもらつただけで、支那の方はこれを何んといふかといふことは知つてゐるが、實行は餘りやらなかつたので、これをやる人がないからさういふ言葉が發達して來たのであります。丁度日本で喧しくいろ／＼な規則を作るといふのは實行しないからさういふ規則を作るのであつて、皆がちゃんと實行してをるならば規則といふものはない、規則が綿密な程その國家がだらしないといふことになるのであります。支那人の家に參りますと、日本人の家にも時々あります。座敷にいろ／＼なことが書いてあります。忠孝を重んぜよ、大義名分を重んぜよといふことが掛軸や、額にして掲げてありますが、そこで賭博をやつてをるといふ状態であります。言葉だけ發達して實行をやらなかつた。日本に於ては忠とか孝といふものは以前から行つてをることです。ですから、それを教へてもらつても思想的混亂も何も致さなかつたのであります。然もそれに更らに儒教が朱子學と結び、禪宗と結びつくのであります。誠に面倒な話であります。支那の儒教それ自身が段々と言葉の字義——意味の解釋といふものが段々移つてゆ

精神を實際に行はねばならぬといふことを喧しく唱へまして、そこで朱子學に於ては大義名分といふことを非常に喧しく言つたのであります。大義名分の思想を喧しく言つたのは、鎌倉時代にさういふ事柄が日本に入つて来たからで、それらが誠に強い感化を興へましたのが吉野朝時代に於ける大楠公を始め北畠親房、顯家の如き當時後醍醐天皇を奉じて熱烈な勤王運動を起したところの少壯の元氣潑刺たる人々にこの朱子學の大義明分の思想が強く感化を興へてをるのであります。支那に於てもそれは唱へられてをります。けれども實行に移されてをりません。日本に於ては實行に強く移されて来てをるのであります。話が一寸複雑になりますが、これが武士道の精神の中に入つて参り、さうしてそこに又禪宗の要素が結びついて、平安朝時代のものゝ哀れを感じる、弱き者を助けるといふ優しい思想が前から養はれて来てをりますから、それに加はりまして非常に美しい櫻の如き武士道といふものが出来上つてくるのであります。然もその時代に於ては大義名分と申しましても、それは武士が仕へてをるところの主人、例へば鎌倉幕府の將軍即ち頼朝、或ひは執權北條氏であるとか、足利氏であるとかさういふ人々のために盡すといふ意味にもなつてをつたのであります。それは一面からは國體の觀念といふものがまだ十分一般には徹底してゐなかつたからでありまして、兎に角信仰、思想の上になつてもいろ／＼さういふ變化を遂げて来てをるのであります。然も尊いのはあの惟神の道であります。白衣の裝束をつけて笏を持ち「高天原に云々」といつて神様にお祈りする昔ながらの姿、神様を拜むといふことは少しも變らず、ずつと今日まで

續いて来てをるのであります。日本にはいろ／＼なものが入つて来てをりますが、日本人が元から持つてをる敬神崇祖の觀念といふものは、キリスト教であるとか、佛教であるとか、儒教であるとかいふものは全て宣傳の宗教でありまして、盛んにそれらは世界に向つて説教をしてをります。併し日本の神主さんは昔から説教をしたことはいないのであります。説教はしないが一旦國家的な大切な出来事が起つた場合には益々その光りを増して来るのであります。これが非常に尊い點であります。兎に角斯ういふやうにいろ／＼なものが交り合つて来てをるので、藝術の上になつても多種多様な方面に現はれてをるのであります。日本人の藝術は大和の法隆寺の建物を見ても、これは支那の大工が建て、支那の技術家が拵へたのだと申しますけれども一體日本人の一番初めの藝術といふものはあの埴輪でありまして、古墳の壁面に簡単な原始的な繪畫が残つてをります。それらによつて考へて見ますと、日本人には昔から藝術的な、藝術を發達させるだけの素質があつたといふことを直ぐ感ずることが出来るのであります。何んとなくこれは將來發達すべき餘地を持つてをるといふやうな感じが致すのであります。それが發達致しまして、法隆寺の建物となつて現はれて参り、その他幾多の藝術的作品となつて現はれて、建築、彫刻、繪畫等、元より文字に於ても支那の漢字、漢文を入れてをきながら我國獨自の國文學といふものを仕上げて参つたのであります。この國文學を仕上げるといふことは餘程の文學的素質がなければ出来ないことであれだけ進んだ大陸の文化、漢文學が滔々として入つて来て、日本人は誰も彼れも漢文學をやつた、その間

から國文學といふものが生み出されて、源氏物語を始めとして、澤山な國文學として優秀な作品が著はれてをるといふことは、日本人には文學的な素質があつたからであります。然もその中には佛教から入つた思想、儒教の思想、各種雑多な思想が入り、然も純日本文學といふものがそこに生み出されて来てをるのであります。日本文學は全く日本人が創造したところのものであります。日本人は何も考へたことはない、皆眞似だと申しますけれども、日本文學は決して眞似ではありません、國文學には全體に支那のものはないのであります。日本人が純粹に創造したものであります。さういふやうに日本獨特のものも澤山あるのであります。兎に角さういふものを仕上げて来てをるのであります。法隆寺に現はれてをるところのものは、支那大陸の文明のみならず、印度の文明、遠くはギリシヤの文明、東ローマの文明を加へて、それらのものが綜合されて表現されたものが法隆寺の藝術であります。さういふやうに何んでもドン／＼吸収して居ります。次にそれを政治的の上から眺めたいと思ふのであります。

日本の政治は、二千五百有餘年の間の歴史を見渡して見ますと、最初の時代は歴史上では氏族政治の時代で、大化の政新までを氏族政治の時代と申します。これは一種の、封建政治ではありませんが、地方分權の政治であります。各地方の氏上を通じて政治を行ふのであります。政治、社會、經濟の單位といふものは氏族或るひは血族集團が一つの單位となり、天皇が一番の統率者として、天皇がそれを通じて政事を籌されるのであります。さういふ封建的な分權政治といふものが行はれてをつたのであります。次ぎは天皇親政の

時代であります。律令制度、大寶律令によつて行はれたところの時代で、これは聖德太子の頃から次第にこれに向ひかけ、その時支那では隋といふ國が起り、續いて唐といふ強大な國家が起つて來ましたので、日本人はそれに對して地方分權的な政治をやつてをては支那の大きな力に抵抗することが出来ないといふので日本國內の統制強化を致しまして、所謂統一國家といふものを建設して、そして出来るだけ中央集權的に、天皇の御下に中央集權の堅い強力な國家を建設しなければならぬといふやうな考へ方が出まして、それから大化の改新が行はれ、續いて桓武天皇の時代から平安朝時代にかけて非常に國家意識が旺盛になつて來ました、古い時代で國家觀念の非常に強い時代は、やはり奈良朝時代を中心とする時代であります。國家の統制といふものが非常に探られた時で、天皇の御稜威の非常に高い時であります。それが藤原時代に入つて參りますと、統一國家はやゝぐらつて來るのであります、藤原時代に入りますと、攝政關白——攝關政治といふものは支那政治の模倣であり、その影響を受けて攝政關白政治が行はれて來たのであります。藤原氏の政治状態は攝政關白となつて政治をやつて居るとはいふものの、實は私事でありませぬ。國家といふものゝ全體の政治をやつて居るのでなく、極めて個人的私的的政治をやつて、これが攝關政治となり、攝政關白となつて、幼少の天皇を奉じて我が儘勝手な政治をやりかけて來たのであります。それは我が國の國體から申しますれば全然排斥すべき處の變態政治である、その時代に一方では國文學といふものが發達して居り、これは先程申したことゝ關聯して居るのですが、とに角さう

いふ變態政治が現はれて、次に現はれて來るのは御承知の院政といふものが出て來るのであります。院政といふのは、天皇が御位を退り去かれて、法皇になられて、國家の政事をみそなはれるのを院政と申します。天皇の位を退り去られた方が政治をお執りになるといふことは、現に天皇におほします、實際天皇にあらせられる方に對して變な形になつて來ますので、現にみまます天皇に對して、上皇様、法皇様と申し、これ亦變態政治であります。我が國の國體の本義はどこまでも天皇親政といふことに存するのであります。然るに天皇自から政事をみそなはせられず、藤原時代は攝關政治といふものを勝手にやる、又上皇、法皇様が政事をお執りになるといふことで、天皇の地位を解釋することが出来ない、これは非常に變態政治の現はれでさういふことから起つて來る社會の秩序、國家の混亂といふものを何とかして治めなければならぬ、統一しなければならぬといふ必要から現はれて來たのが源賴朝らの武家政治であります。

武家政治といふものは、天皇が賴朝に政事を委託された形であります、委任されたのでありますけれども、併しながら天皇は固より、賴朝ならば賴朝に、政治を委せるといふことをお好みになつてゐないです。それを憚て賴朝にするのでありますから、これから徳川幕府の末まで、武家幕府といふものは國體の本義から申しますればやはり一つの變態の時代に反した處の政治形態であるといはなければならぬのであります。賴朝が幕府を開くといふ事情を申しましたならば、何故に斯ういふことになつたかといふことが分るだらうと思ひます。賴朝が初め旗揚げを致し、平家は一時安

徳天皇を奉じて屋島權ノ浦へ落のびました時、賴朝は弟三河守に、義經が屋島權ノ浦へ平家を追撃して行つたのに對して、手紙でハツキリと斯く注意してゐるのであります。「平家が若しも壇ノ浦に落のびれば、何處までも討たなければならぬが、自分が絶えず心になるのは安徳天皇の御身の上である、安徳天皇は如何におなりになるか、それが氣に掛つて致し方がない。どうか力を盡して、安徳天皇の御身の上に故障なきやう出來るだけのことをせよ、返へすゝも注意して欲しい」といふことを懇々と籠頼に申付けて居るのであります。それから賴朝は武士を戒めた言葉に、「一體武士といふものは如何なることが務めであるかといふと君のため、國を護るのが武士の務めであるぞ」といふことをハツキリいつて居るのであります。然も賴朝がそれ程君を思ひ、國を思ひ、皇室を崇敬致しましたに拘らず、征夷大將軍として、別に鎌倉幕府を率いて政治の權を取つてしまつたといふことほどいふ事情

かといふと、當時社會が非常に混亂致して居り、平家の殘黨が控へて居りますし、當時の京都の公卿貴族は混亂した社會の秩序を恢復して治安維持するだけの能力がなく、止むを得ず賴朝が起つて治安を維持すべく、軍事警察の權を握つてしまつたのであります。それがその後も、その儘傳へられて江戸時代に到るまで傳へられたのであります。賴朝が武家政治を執つたといふことは、そこに既に天皇の思召に反するといふことは當然であります、武家幕府が出來た當時、武家幕府は倒さなければならぬといふ一つの思想は暗々裡に國家の潜在意識として動いてをりました、我が國の政治形態の上から申しますと、武家

といふものが政治を採り、京都に於ては天皇が在して、朝廷が儼として存在してをります。この二種の形の政治といふものは許す可からざるものであるといふことの考へといふものが、當時武家幕府が出来ると共に起つて来てをります。それが後鳥羽上皇の承久の變となり、後醍醐天皇の建武中興の政治となつて現はれてをるのであります。これが武家幕府は國體の本義に反するといふので、幕府といふものゝ存在に對して華々しく戰つたのが楠正行、新田義貞、北畠顯家といふ人々なのであります。然らば武家政治なるものはそれ程日本の國家に悪い害毒を興へたかといふ問題であります。國體の上から申しますれば當然排斥すべきものでありますけれども、この武家時代といふものの今日の日本民族に與へた政治的の力といふものは非常に強いのであります。武士生活なるものは非常に素朴な、質實剛健、忠實であつて名譽を重んじ、勇敢である。武家政治といふものは、政治の上に於ては許すべからざる形態をとつてをりますが、これは江戸時代の末になり目覺めまして、本當の大義名分は天皇のために盡さなければならぬといふことに武士も覺めて来てをります。それが非常に強い政治となつて日本武士道の精神となり、現はれてをるのであります。この封建政治、武家の政治といふものは換言すれば武斷政治であり、軍人政治であります。武力によつて國家を治める政治であります。これが日本の歴史に相當長い間續いたといふことは今日の日本の國家を非常に隆盛ならしめた一つの要素をなしてをるのであります。武家の政治、武力の政治といふものは、これは支那の歴史に於ては見られないところでありまして、支那には封建政

治といふ言葉はありますけれども、併し支那の歴史には日本のやうな封建政治、ヨーロッパの中世に現はれましたやうなヒューダリズムといふ封建政治の姿が見られないのであります。日本に於ては相當長い間續き日本人に武士的な素質を興へてをります。武士的な素質といふものはいろ／＼の點で考へられますが、先き程まで申しましたことは要するに歸するところ奉公觀念であります。君のために盡すといふ觀念であります併し鎌倉時代では頼朝のために盡すといふのが君に盡すといふ武士の考へであります。それが主君に盡す言葉でありますけれども併しそれが目覺めて来て、大楠公の如き、或ひは新田義貞、名和長年の如く天皇の御爲に盡すといふ奉公の觀念に變つて來るのであります國家社會のために、又君のために身を捧げるといふ犠牲の精神が武士の精神に混入してをるのであります。武士生活といふものは元來種々の關係から結びついてをるのであります、そこに起つてくるころの奉公の、恩義觀念といふものが非常に強く現はれてくるといふことは當然であります。武士の奉公觀念といふものは、單に武士のみに限らないので一般の人々にまでそれが行き渡つて居るのであります、従つて江戸時代には町人、百姓にも奉公の觀念を浸潤して、丁稚小僧が奉公する時、女中が他に備はれてゆく時、これも亦奉公である、公に君のため、國のために盡すのではあります、奉公に行くといふやうに申します。これは武士の生活といふものが一般社會に擴がつてしまつたため、さうして奉公觀念といふものが如何なる社會層にも行き渡つて、例へば商賣人なり、町人の傭ひ人でも主人のために身を捨て、願はず、犠牲となつ

て主人の店に働くといふこの精神が強く侵み込んで來たのであります。さういふ意味で日本人の武士の精神といふものが相當長く續いたといふことは非常に力強いものを日本人に與へ、且つ先き程申しましたやうに日本人に意識的な方面の發達の上に非常に役立つことになつたのであります。斯ういふやうに申し上げて參りますと際限のないこととありますが、これを外交上の方面から見て支那との文化關係、交通關係、蒙古との關係、日清、日露の關係といふやうにいろ／＼考へられますが、兎に角斯ういふやうな政治の上に於ても又思想、經濟の上に於ても日本民族の本來の素質の上に於ても多少の變化を遂げて來て居るのであります。併し物事は單に變化だけををるものと致しますれば、それは新しがりやと同じでございまして、輕薄才子のやり方でありまして變化を遂げたゞけでは本當の發展向上といふものは認められない、氣の移り變りの早い人と云ふべきです。例へば新しいものを嬉んでをると同じであります。それでは本當の發達といふものは望まれない。日本ではさういふやうな形の上でも變化を遂げて居りますに拘はらず、根本的のものが變つてゐないのであります。先き程申しました敬神崇祖の觀念であるとか、或ひは政治の姿の上に於ては攝關政治、武家政治といふやうにいろ／＼姿を變へて現はれましたけれども、我が皇室に於かれましたは何等の微動だにせられず、その尊嚴を持續せられ、悠久に榮えますといふこの姿を現はしてをられるのであります。ものゝ變化と同時に一方には傳統を重んずるといふ、つまり永久に動かすべからざるものが存在してをるのであります。歴史のバラ

イテ一に對して連續性があり、動かされないと云ふものがなければならぬ。世の中の過去に從つて、例へば一個人の場合に於ては、今まで米屋をしてつたけれども、つまらないから雜貨屋になると云つて變へて行く、併し先祖傳來の一生懸命に働くと云ふ精神まで變へてしまつては困る、これは何處までも持續致さなければならぬやうに、國家の上に於てもこれの動かすべからざることは申すまでもないのであります。万世一系の天皇を戴いて立つてゐるといふこと、天地と俱に極まりなく皇運を扶翼し奉るといふこと、祖先を崇ふといふやうな根底的なものは動かさない。民族的に見ても皇室を中心とするところの人々にいろ／＼なものが盛んになつて、さうして新しいものを生み出す或ひは神の信仰、祖先の信仰といふ、又いろ／＼な佛教が盛んに注入してくる。政治の上でも皇室を中心として表面的にはいろ／＼な姿を現はしてはるるが、生地は變へない、然し表面は千變万化の色採りに變へてをる、これでこそ始めて發達進歩といふものがある

のであります。明治の始めの王政復古と申しますが、新しくなるといふこと、古に歸るといふこととは同じことでありませう。王政復古といふことは明治以前の日本を改革しなければならぬといふことである。今日の日本は國難に直面して居る、大いに日本は覺悟を決めなければならぬ、二千五百年といふ歴史的な回顧神武天皇の建國の古の精神に歸らなければならぬ、歴史的な回顧復古の回顧といふことは復古即改革である、古に復るといふことが、これが本當の改革であります、儼として動かすべからざる傳統の精神といふものが時に社會の進歩變遷に伴ひ、變へるべきものは變へて現

勢の進展に調和して行くといふ點であらうと思ひます。從つて私は日本の歴史を考へ、日本の文化といふものは將來に於てはいろ／＼な外國の文化、文明といふものを吸収すべきものであると思ひます。さうして入れるべきものは入れる代りに動かすべからざるころの

西本寛一氏著

「改正商法解説」

野村 次夫

改正商法も遂に第七十三議會を通過、去る四月五日法律第七十二號として公布せられたので今や正に實施を待つばかりになつた。この改正商法に付ては昭和六年その改正要綱が發表せられて以來今日まで新聞雜誌紙上に或は立案起草に直接間接關係せられた人々により、或は之を批判する立場にある人々により種々解説批評がなされ、加之既に二、三まとまつた著書新舊比較條文等も出版されてゐる位であるが、茲に紹介せんとする校友辯護士西本寛一君の著「改正商法解説」も亦右に屬する文字通アツプデーの著書である。本書は改正商法の全條文をその順序に従ひ掲げ、之に關する舊條文をも反復引用、以て兩者を對照しつゝ、新舊二法の異なる處其他一般的の解説を爲したものであつて、我々はこれにより、或る事項に付舊規定が如何に改正されたか、如何なる條文が削除され、如何なる新設規定が設けられたかを一見して知り得るのである。法律の改正にあたりては先づ如何なる改正があつたかを個々の條文に則して調べ、次で之に對する立法趣旨を知ることが必要であるが、本書は右の必要を十二分

基本的なもの、根底的なものは何處までも大切にして忘れないやうに絶えず歴史的な回顧、傳統の精神を重んじて行かなければならぬと思ふのであります。これで大體云ひ盡したと思ふのであります、私の話はこれで終ります。(文責編輯者)

に充てられるのである。

菊版四三八頁の力作を斯様に早く出版された著者の努力を多とし、過去數年に亘る不斷の淨心が漸く結實したことを心より祝福し度い。尙改正商法に就ては此後種々こまかい點に付解釋上疑義を生ずるであらうし之が運用上に付ても種々問題が起り、ひいては改正の是非に付ても再檢討が爲されることと思ふが、多年株式會社に關し學理實際兩面より研究に従事せられ、既に株金拂込論、株式會社定款論、株式會社重役論、株主總會決議無効論の四大著書を刊行せられた著書に於ては、從來の著書の續刊として更に改正商法に基く各種モノグラフィの發刊を繼續せられ、此等問題の解決にあつて頂き度い。切に著者の自愛、健筆を祈る(大同書院發行、定價三・八〇)

大阪にも是非一つ欲しいと思つてみました。文化的の薫りのいとも高い店が

十二段家書房 と云ふ名で

左記に生れました

知識人諸氏の御愛顧をお願い申上げます

難波驛御堂筋東へ入ル 電話戎四四七三番

伊太利雜誌

教授 德尾俊彦

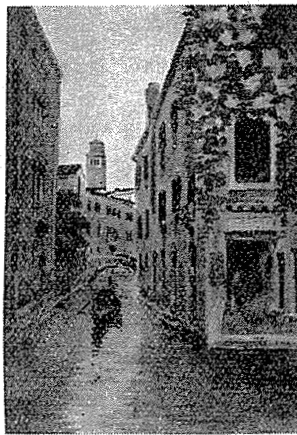
今頃、伊太利人に挨拶を言ふとしたら、先づ「近頃歐洲外交の中心は、羅馬に移りましたね」と、ほめ立てるのもよからう。とにかく、最近、新聞紙上の歐洲來電には、必ず伊太利といふ文字が現はれ、重大問題には必ず伊太利が口を出してゐる。纏つて我國を見れば、再度の伊太利使節團來朝で人々は「サボイア」王家の紋章附の三色旗に親しみを覚え「ベンベスト」は、今や影薄い「ウエルカム」に代つて、日本語になつてしまつた。

大伊太利

偉人「ムツソリーニ」が、その四千萬同胞を率ゐて實現を期してゐるのは、實に大伊太利である。長靴狀をしてゐる伊太利は、他國人の頭に浮ぶ伊太利であつて、それに「ダルマチア」地方や「マルタ」島や「アフリカ」北岸の一部などを加へたものが大伊太利である。伊太利人として、昔の羅馬帝國時代のことを想へば、誰しも、今の長靴の伊太利で満足できるはずがない。とにかく、新興伊太利は遠く昔の羅馬帝國に思ひを馳せてゐることは事實である。こゝに、その一例を擧げてみよう。過般の「ファッシスタ」使節團は、日本滞在中の歡待を感謝する爲に、方々に「メタル」を贈呈した。その「メタル」には、次の語句が刻んである。

Dopo quindici secoli l'Impero
の數に 十五 世紀 帝國は
 riappare sui colli fatali di Roma.
再興す の上は 正 致命の の 山

(十五世紀經つて帝國は羅馬の縮命的の丘の上に再現する) 伊太利を實現する爲には、種々の事を必要とするのであるが、人口の増殖が、その一つである。佛



水都ベニス

國のやうに、年々、人口減少の途を辿つてゐるやうでは、大伊太利は實現されるものではない、それで「ム」首相は、結婚を奨励し、未婚者に課税し、子供がある家庭には減税し、一方では青少年の體育を盛んにしてゐるのである。年々、四十萬以上、人口が増加する伊太利と、減少状態の佛蘭西とは、今より數世紀後に

は、どういふ關係になるだらうか。人口増加は、外交上に於ける最も有力な海外進出理由であることは、言ふまでもない。第一回の使節團が大坂に滞在してゐたとき、或道路上で、團長は、二十三、四とおぼしき若妻から三歳位の幼兒を取り上げて高く、さしあげて歡呼に答へた。次に、若妻に向ひ、おぼつかない日本語で「あなた、澤山、子を産みなさい」と挨拶を言つた。その若妻は、この變な挨拶に顔を赤らめてゐた。恐らく團長のこの言葉を表面的に解釋して、多少冷かされたの地位に思つただらう。然し、實際は、國の爲に澤山子を産みなさいの意味であつて、近頃の伊太利人が常々、心に思つてゐることが、挨拶に現はれたのである、さて子供が多い伊太利から來た使節團一行が、日本に來て「日本には、子供が多いな」と再三、感心してゐた。見馴れてゐる私共には、少しも解らないが、これはほんとであらう。然し邦家の爲、誠に喜ばしいことである。

伊太利人

昔、羅馬帝國が歐洲を席捲してゐた頃は、國內には剛健な氣風が漲り、男は盛んに「スポーツ」を行つて心身を鍛練し、又、入浴を非常に好んだらう。今「ローマ」市の一隅に残つてゐる「カラカラ」の浴場は、その最も有名なものである。これは紀元第二世紀に「カラカラ」皇帝により建設されたもので、長さ二百二十一米、幅百四米の矩形を呈し、水浴場、温浴場や蒸氣浴場まであり、その側には「スポーツ」場もあつたことである。千七百人が入浴出來たことであるから、我國の千人風呂とかいふより六百人以上だけ多い。

ところが、十數世紀を経た今日の伊太利人は、風呂嫌ひで、人口百十萬の「ローマ」市に公衆浴場は、十もない。貴族富豪の家でなければ浴室がない。

現代伊太利人の體格は、歐洲人中で、恐らく一番悪いだらう。身長大ならず、猫脊である。それも、その筈、千八百七十一年に伊太利が統一されるまで、國內分裂と外敵侵入に悩まされ、統一後と雖「ム」首相就任前までは、體育保健が閑却されてゐたからである。然し今や大々的に體育が行はれてゐるから、必ずや一般體格は向上されるであらう。

伊太利人の性質として特示したいのは、感激性と社交性である。火山國の人民は、感激性に富むといふ傳説もあるやうである。強い感激性があると、どうしても熱し易く冷め易い。嘗て「フューメ」事件に際し「ダヌンチヨ」が「ローマ」市の「レヂーナ、ホテル」の「バルコニー」に立つて路上の民衆に向ひ、愛國的熱辯を振つたことがあつた。その民衆の感激は、直ちに伊國民全部の感激に化して「フューメ」事件を解決せしめた。もつと近い例を求めれば、近頃、時々「ラデオ」で放送される「ム」首相の演説でも解る。「ム」首相が、その雄辯を振ひつゝ暫らく述べると、忽ち歡聲が起つてその演説を中斷する。甚だしいときは演説と歡聲とが二、三分置きに交互する有様である。これらを以ても、如何に伊太利の感激性が強いかが解る。然し、一面には冷め易いのである。歐洲大戦直前に於ける伊國の態度に想到すれば思ひ半ばに過ぎるものがある。社交性は、勿論感激性と密接な關係がある。一日の面識を以て百日の交りある如き感を與へることは

伊太利人でこそ、出来ることで、到底英吉利人などのよく、なし得ないことである。個人的交際や、商業的接觸のときには、これらの事に、よく注意するべきである。

頭腦は「ラテン」人の特性として緻密で且、鋭敏である。古くは「ダンテ」「ボツカツチヨ」の如き大文豪や「ミケランヂエロ」「ラファイェツロ」の如き大畫家や「ガリレオ」の如き數學、物理學、星學なんでもござれの學者、近くは世界無電界の大恩人「マルコニー」などは、伊太利人の大いに誇りとしてゐる所である。

伊太利人に言はせると伊太利人の喉は特別なものであると言ふ。これは、ほんとも知れない。世界的名歌手「カルソ」を例に引出さずとも、近頃、日本の歌手が、續々伊太利に聲樂を勉強に行くことによつても想像される。

伊太利語

伊太利語は、「ラテン」語系に屬するもので、伊太利語としての、成立は、第十一世紀に始まり、第十四世紀に完成されたといはれてゐる。佛語に似てゐることは勿論であるが、性質上は、佛語に比し一層「ラテン」語に近い。

伊太利語には、殆んど無音字なく、語尾は殆んど母音で終つてゐる。従つて、その言葉は、よく人の耳に通じ、調和良く且、快調である。この快調は特に伊太利人の性質が然らしめるのである。

伊太利は、南北に長い國であるため、當然、その南部地方と北部地方とは發音上に於て相違がある。先づ「トスカーナ」地方の音や語發法が良いと見做されてゐる。

これは、その地方が中世紀に於て政治的中心地であり、又「ダンテ」や「ペトラルカ」の如き文豪を産み文藝的中心地でもあつた爲であらう。

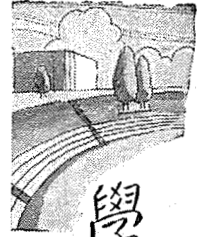
文法的見地からみて英佛語などと著しく異つてゐる點は、主語、代名詞を通常省くことである。この事は日本語に似てゐる。例へば、路上で、知人に會つたときには「どこに行きますか」と尋ねて「あなた」といふ語を用ゐないで済む。

Dove va ?
どこに 行きますか、

これは一寸、簡單で都合が、よいやうに見えるが、仲々さうではない。殊に、相手が言つた事柄を理解しやうとするときには、英佛語のやうに you や yours があると人稱だけは、すぐ解つて大いに助かるが、伊語では、それが通常、附けられないから、動詞の活用をよく知つてゐないと、何が何だか少しも解らない。名詞の語尾に接尾語をつけて種々變つた意味を表はすことが盛んに行はれる。これは便利である。

stanza 小節 stanza 大節 stanza 小節 stanza 大節
stanza 小節 stanza 大節 stanza 小節 stanza 大節

序に、伊太利の大學に就て述べやう。國立大學が二十一と、私立大學が五つある。この數は、日本では反對になつてゐる。「ポローニア」大學は第九世紀頃から單科大學として存在し、千二百年頃には綜合大學となつたもので世界最古のものとして有名である。伊太利の大學は總て非常に古く創立されたもので、文藝復興以後、暫らくの間は歐洲の學徒は、殆んど皆、伊太利に留學したとのである。



學内報

日本文化講義

本年度學部學生に對する第一回文化講義は、東京帝國大學教授鹽谷温博士に囑し、六月七日午前十時半より豫科講堂に於て開催「日本精神と世界平和」と題されて二時間に亘り、漢學の勤王思想の鼓吹、國體の明徴に與つて方あり、國體の精華の中には孔孟の眞髓が取入れられてゐる點を力説多大の感銘を與へた。

私立大學聯合會

私立大學第十三回聯合會は六月三、四、五の三日間東京日本大學に於て開催され、本學よりは監事武田宣英氏出席した。

祝賀提灯行列

國民齊しく待望の徐州陥落せしに付五月二十三日午後六時三十分より學生生徒の祝賀提灯行列を舉行、本學天六學舎出發、梅田經由大阪時事、大毎、大朝、大阪市役所を訪ひ豊國神社に參拜、中之島公園にて萬歳三唱して解散、祝賀の意を表した。

人事移動

依願解職	專門部講師	上島 勝夫
同	同	龍野健次郎
同	關甲 講師	山本 英男
同	同	上島 勝夫
同	同	榎本金次郎
同	二商 講師	寺川末治郎
講師囑託	專門部(倫理學)	西田 禎文
同	關甲 講師	川上 義治
同	二商 講師	岸田 成計

かくほう抄

- ▽内藤 正剛氏(理事) 去る四月中旬北支、滿洲國に皇軍慰問民情視察を爲し、來る七月には二ヶ月の豫定を以て南洋視察に向はれる筈
- ▽岩崎卯一氏(教授) 五月廿九日東京文理科大學に開催された第十三回日本社會學會に出席「日本貴族政治に於ける尊威、權威、權力について」と題し研究發表された。
- ▽作田 莊一氏(學部講師) 滿洲國人材養成機關として開校さるゝ新京の建國大學副總長に就任せらる
- ▽皆川 治廣氏(舊講師) 中國維新政府援助の下に上海復旦大學跡に新設の建國塾大學理事長に就任
- ▽梅垣 貞一氏(會計課) このほど滿洲國より歸還、目下東區法圓坂町宮田部隊氣付百山隊に服務
- ▽植田 重正氏(講師) 京都市左京區下鴨高木町七九
- ▽西田 禎文氏(講師) 三島郡茨木町茨木一四七七

應召軍務公用者 (其の六)

卒業生

- 平田 圭藏君(昭七 專商) 歩兵少尉野戰部隊小隊長、上海にて昭和十二年十月十四日名譽の戦死
- 狩谷 平司君(昭七 專英) 昭和十二年九月十四日、北支永定河に於て名譽の戦死、陸軍歩兵中尉に昇進 功五級勳六等旭日章を下賜せらる
- 阿郎 正實君(昭八 大法) 山本 敏輔君(昭九 大經)
- 安達 一也君(昭八 專一商) 昭和十三年二月二十三日名譽の戦死
- 濱田 重義君(昭九 大商) 昭和十二年九月十四日上海 月浦鎮北方北曹にて名譽の戦死
- 寺島 正信君(昭一〇 大法) 北村 利一君(昭一〇 大法)
- 渡邊次良七君(昭一〇 大法) 三宅 完君(昭一〇 大法)
- 櫻井 忠良君(昭一〇 專一法) 小堀 欣二君(昭一〇 專一商)
- 龜井 寛君(昭一一 大法) 原 隆三君(昭一一 專一商)
- 錦見 一夫君(昭一一 專一法)
- 中田 昇君(昭一一 專一法) 廣島歩兵聯隊所屬、昭和十二年十月十七日、山西省忻口鎮にて名譽の戦死
- 綾木 昇君(昭一一 專一法) 古川 義男君(昭一一 大法)
- 柴田 直一君(昭一二 大法) 横田 正君(昭一二 大法)
- 野長瀬正道君(昭一二 大經) 中島 安一君(昭一二 大經)
- 村上 秀吉君(昭一二 大經) 三口百一郎君(昭一二 大商)
- 廣瀬 勳司君(昭一二 專一經) 岡村 貞男君(昭一二 專一商)
- 篠田 敏郎君(昭一二 專一商) 吉田 三郎君(昭一二 專一法)
- 上岡 祝太君(昭一二 專一法) 藤井 隆司君(昭一二 專一商)

校 友

大 阪 支 部

恒例の春季懇親會は五月二十二日(日)午前九時、會員百六名の参加ありて阪和天王寺驛發特急電車にて東和歌浦に着、この日天氣清朗快適のピクニック日和三々五々打連れて青葉に薫る名城「虎臥山竹垣城」を見物す。この城五十五萬石の太守として徳川氏御三家の一たる頼宣の封せられて以來彌榮へ、昭和の御代史蹟として國寶に指定されしもの、古りし天守閣に配するに城園内老樹鬱蒼として昔時の豪華を偲ばしめ懷舊の情頗りなり。それよりは電車を利して南海の互利紀三井寺に至る、本名は護國院金剛寶寺、名草山の中腹に在りて西國第二番の札所として聞こゆ、古義眞言を宗旨とし、山門鐘樓多寶塔共に特別保護建築物として名あり、時節柄皆元氣一杯長い石段もものかわ、參詣を終へて眺望よろしき寺務所下掛茶屋にて汗を拭ひ、晝食を名物雀餅に舌鼓を打つ、少憩後、琴の浦新田氏庭園に行き自然と人工の調和を賞覽逍遙すること暫し四時前後新和歌浦「望海樓」に參集す、雄大な海を前にして浴槽に心ゆくばかり身を浸し洗心、都會の垢を拂ふ、五時開會喜多村支部長の會計報告並びに挨拶あり、又學長先生の校友會會則改正に伴ふ種々の御紹介ありて宴に入る、佳境半ば愛國行進曲舞踊に熱烈な拍手の嵐を送り、歡を盡して日出度く解散したのは七時であつた。

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|--------|-------|--------|-------|-------|--------|-------|--------|-------|-------|-------|--------|-------|--------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|
| 引野 秀泰 | 三島 律夫 | 木田 秀太郎 | 木村 健助 | 小泉 幸治 | 藤本 祥雄 | 前田 常好 | 安井 章吾 | 矢口孝次郎 | 山田卯三郎 | 歌橋 千秋 | 簡松忠次郎 | 中村良之助 | 中谷 敬忠 | 高田貫左右 | 丹 二良 | 玉木 三郎 | 吉田 晋松 | 加藤金次郎 | 川崎齋一郎 | 岡本 義男 | 宮田 貞男 | 本田 武藏 | 原田鹿太郎 | 飯田 正一 | 今田 光匡 | (宋 賓) | 兼松兼太郎氏 | 加藤 清氏 | 中尾武雄氏 |
| 森内 梅吉 | 南 清 | 三浦 三郎 | 菊池金次郎 | 小瀧 詮 | 袋井榮太郎 | 松廣 末松 | 山崎 敬義 | 山本 順應 | 山本 實次郎 | 野崎勇二郎 | 梅原貞治郎 | 名田 京一 | 中塚 竹藏 | 永田 良雄 | 田中 健三 | 武田藏之助 | 吉木 留登 | 神尾敷民藏 | 河村 信一 | 小野 英敏 | 遠部逸太郎 | 富田金三郎 | 八島 治一 | 一海 景宥 | 伊藤 元 | 飯田 清藏 | 加藤 清氏 | 中尾武雄氏 | |
| 鈴木 八郎 | 三本甚太郎 | 三枝樹正道 | 木村順次郎 | 赤羽豊治郎 | 福田 次彦 | 松原 健一 | 松本 芳太郎 | 山口 展雄 | 黒田莊次郎 | 植田 完治 | 村松 岩吉 | 永井 量一 | 内藤 正剛 | 田邊 清市 | 高松長左衛門 | 吉川芳三郎 | 柏元 孝治 | 神尾敷民藏 | 桂 忠雄 | 大宅元三郎 | 大崎萬太郎 | 榎木 浩藏 | 丹羽宇三郎 | 生島 藤藏 | 飯田 清藏 | 糸島實太郎 | 加藤 清氏 | 中尾武雄氏 | |
| | 新町 徳之 | 道端常治郎 | 岸本 芳夫 | 喜多村桂一郎 | 藤原 光治 | 松本 静史 | 松本 芳太郎 | 安川安太郎 | 山野 巖 | 齋貫 宣 | 浦田 豊 | 中村 岩見 | 中村 邦次郎 | 高沖 次郎 | 武田貞之助 | 吉村 種藏 | 河村 宜介 | 神戶 正雄 | 長 義道 | 富田仲次郎 | 西本 寛一 | 西本 寛一 | 西本 寛一 | 西本 寛一 | 西本 寛一 | 西本 寛一 | 西本 寛一 | 西本 寛一 | 西本 寛一 |

在 學 生

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|----------------|-----------------|----------------|--|
| 宮田 正二(專一 關) | 大久保圭造(專一 英) | 青山 正六(專一 商) | 小西 藤一(專一 商) | 岡崎 冠(專一 商) | 栗谷萬次郎(專一 商) | 更家 貞雄(專一 經) | 平田 美雄(專一 經) | 堂浦 千里(專一 法) | 中西 桂(專一 法) | 内芝 謹五(專一 法) | 内芝 謹五(專一 法) | 黒岩 米生(專一 法) | 中西 卯七(專一 法) | 柿ヶ原秀美(專一 法) | 増山 榮夫(專一 法) | 西川敬次郎(專一 法) | 岡部 重信(專一 法) | 木村 清造(專一 法) | 藤原 榮一(專一 法) | 足達 重章(專一 商) | 齋藤 作典(專一 商) | 富山 正信(學部 英) | 竹信 守(學部 法) | 井上 武男君(昭一 三大法) | 隈田儀三郎君(昭一 三專二法) | 秋山 雪雄君(昭一 三專英) | |
| 北支にて昭和十三年三月十六 | 藤岡 英輔(專一 英) | 稻葉 幸治(專一 商) | 秋田吉太郎(專一 商) | 西垣 菊三(專一 商) | 藤原 仁(專一 商) | 中山 高信(專一 商) | 千草 登(專一 經) | 平山 一雄(專一 法) | 芝田日出男(專一 法) | 北 敏夫(專一 法) | 北 敏夫(專一 法) | 荊家 恒雄(專一 法) | 邑岡 稔(專一 法) | 辰巳 政稔(專一 法) | 柴山 茂(專一 法) | 内藤 叢(專一 法) | 福島清太郎(專一 法) | 西方 才智(專一 法) | 樋口英太郎(專一 法) | 嘸田 幸男(專一 商) | 平澤 正男(專一 商) | 東本 春次(專一 商) | 奥山 榮治(學部 法) | 雪雄君(昭一 三專英) | | | |

福岡支部

春季總會を四月十七日「春本」に於て開く、午後四時開會、支部規則を議決し、支部長池田重吉、幹事古賀肇、馬場田吉、岸田哲雄重任に決し、福岡日々新聞從軍記者會員阿部武夫氏の支那事變戰爭談の未だ新聞に顯はれざるものを聴き、直ちに宴に移る、池田支部長の挨拶ありて時節柄美人抜きにて快談爆笑、和氣靈々裡に母校の萬歳を三唱して散會したるは九時頃なりき。

大連支部

四月二十日午御六時半、大廣場東栢ビル三葉食堂に於て秀麗會第二十五回例會を開催す、今回は千里山今春卒業生の佐藤、九門の兩君が入會出席し、更に濱島君も久振りに顔を見せてくれて豫想以上の盛會となる慣例に依り新人を正座に着かしめ洪笑歡談其の盡るを知らず、新人又メートルを擧げて其處に老若の別なく愉快なる數刻を過した。九時半學歌を高唱して散會

(出席者) 木村 儀八 室山宇太郎 秀島 全治
高木嘉一郎 濱島 久義 曾我秀次郎 光井 章雄
三橋 正實 平井 三郎 佐藤 丈夫 九門 士敏

新京支部

五月二十六日新京ダイヤ街「伊勢丹」に於て例會を舉行す。會する者十名、幹事より過般行はれたる全新京に於ける同窓生調査の報告ありて、今後の事業につきいろ／＼打合せを行ふ。

尚六月例會には元母校講師たりし建國大學副總長作田莊一博士を聘して講話を拜聽する豫定である。

参会者——廣瀬義雄、喜多初次、大北良之輔、大西敬而、三宅美孝、古川一雄、小山幸尚、藤田藤一、西本菅兒、櫻木一雄

新京支部事務所は左記に移轉す。

滿洲國新京中央通り二二、喜多初次方

富山在住校友

矢野知事歡迎會

關大が生んだ初の良二千石、矢野兼三氏を知事に迎へた富山縣在住校友は、五月十五日富山市櫻木町奥田屋で盛んな歡迎會を開催した、來り會する者、縣下在住校友十二名のうち十名が集つたのだから、殆んど全部と言つてもよいわけ、宮本魚津署長に無理／＼開會の挨拶を押しつけて宴を開いたのが七時、矢野知事の感謝の辭あり、懷談に時を過し再會を約して散會したのが九時頃であつた。出席者左記の通り。



河合省三 田畑留七 矢野兼三 栗山基一 中島政文 菅原陸郎 富島政治郎 宮本太郎 會迎

動靜

白神 完君(推) 廣島控訴院檢事より大阪控訴院檢事に轉任

小倉 米吉君(明三〇) 帝國生命保險會社大阪支店退職

長本 元男君(明三九專法) 岡山地方裁判所檢事より下關區裁判所檢事に轉任

古田吉五郎君(明三九專法) 東京合同タクシ一會社勤務

井上信一郎君(明三九專法) 大阪市港灣部港營課長退職

石原 孫市君(明四一專法) 大阪市經理部用地課長より同監査部長に轉任

長 義道君(明四二專商) 大阪市電氣局勞働課長退職

山本 高造君(明四五專法) 館林稅務署直稅課長(群馬縣邑樂郡館林町)

鳥羽源四郎君(明四五專法) 大阪市電氣局購買課長退職

住所、天玉寺區小宮町四七

柳川茂十郎君(天二專商) 大阪市立刀根山病院事務長より市立衛生試驗所庶務部主任に轉任

山本善次郎君(天三專法) 大阪市水道部業務課長退職

栗山 基一君(天三專法) 富山地方裁判所出町區裁判所監督書記

岡本 義男君(天三專法) 辯護士、東區空堀通二丁目五九ノ二(電東一七八)

米谷卯三郎君(天四專商) 大阪市東成區長退職

室山宇太郎君(天四專法) 從來山縣通東和汽船會社にて營業中の處、五月一日より山縣通一四一に移轉

嘉納 亮三君(天四專商) 大阪市電氣局主計部購買課契約係長より同主計部用品課長に轉任

正木 公雄君(大八 大法) 大阪市電氣局扇町電燈營業

所長より同電燈部電氣科學館經營係長に轉任

滿田清四郎君(天九 大法) 廣島控訴院判事、住所廣島

市鶴見町五二二ノ一

木下 一男君(天九 專法) 大阪市教育部學務課學事係

長より西淀川區出張所長に轉任

高田 密藏君(天二專法) 大阪市此花區庶務係長より

東淀川區出張所長に轉任

開野 甲子君(天二專法) 東淀川區收入役解職

宮本 五郎君(天二專法) 警部、富山縣下新川郡魚津

警察署長

泉 浩三郎君(天二專經) 大阪市主計用品課倉庫係長

柏原 能心君(天二專法) 大阪市庶務部統計課統計係

長に

久田 一榮君(天三專法) 野村生命保險會社京城支店

長(京城府黃金町二ノ二八二)

眞津 庫造君(天二專法) 大阪市主計部用品課倉庫係

長より同高速部庶務係長に轉任

木村 昶君(天二專經) 大阪市産業部、住所住吉區

駒川町八丁目三〇

金谷 勇君(昭二 大法) 大阪市産業部

札野 茂次君(昭二 大法) 齋藤商店大阪本社(西區土

佐堀通大同ビル)に轉勤、住所 港區九條北通三

おねがひ

住所、職業、勤務先の異動や改姓名の際は、お忘れなくハガキ一本御投函を乞ふ。

關西大學學報局

丁目六八二

笠井 義延君(昭二 專法) 大阪市此花區戶籍兵事係長

より同庶務係長に轉任

福島政次郎君(昭二 專法) 警部補、富山縣東礪波郡高

岡署福野警部補派出所長

杉田 英一君(昭二 專商) 第一製藥會社高槻工場、住

所三島郡高槻町常盤町八四

松葉 政芳君(昭四 專法) 大阪市東淀川區戶籍兵事係

長に

鈴木 寛君(昭五 大法) 日本化學工業會社常務取締

役(西區江戶堀南通三ノ一五)住所住吉區昭和町

西三丁目二〇

名田 京一君(昭五 專法) 大阪市庶務部文書課審査係

長に

吉橋 鐸美君(昭六 大法) 大藏省函館地方專賣局事業

課長より札幌地方專賣局事業課長に轉任

諏訪富三郎君(昭六 專法) 東京化學鑛業所工場長(江

戸川區小松川一ノ二九)住所 東京市江戸川區小

岩町三ノ一三三四

水島 訓司君(昭六 專經) 大阪府立寝屋川高女教諭よ

り和歌山縣立女子師範教諭兼縣立日方高女教諭に

轉任、住所 海南市日方相生町一〇四六

長谷川 隆君(昭六 專經) 上海福和公司支配人、住所

上海海濱路二二三弄六號

砂野 隆君(昭七 大法) 北京惠通航空股份有限公司

(北京內一區皇城根九號)

今村 茂君(昭七 大政) 滿洲鑛山會社新京本社勤務

山崎福太郎君(昭九 專三經) 東京火災保險會社を辭し大

阪朝日新聞社營業局に勤務

高野山留學生に

從軍布教師を兼ねて

高橋大善氏は(昭五 大法)と稀らしく二學科を了へた人、築港高野山に籍を有して、このたび留學三年の豫定で五月二十一日大阪出發北京廣安門大街報國寺街高野山北京別院へ赴任したが、留學の傍ら開教師、從軍布教師をも囑託され、又現地に於ては日華語學校に教鞭をとり、多面に涉り活躍してゐる。

(上略) 北京は首都の地には候へ共内地の正義と清潔の美は未だ整はず實に曠漠たる大平野の中の黃塵の都にも見え候、然れども都市の鬱蒼たるアカシヤの緑濃き街路樹の兩側に聳える城門堂宇の宏莊強大に、その絢爛たる極彩色に目を奪はれ候と共に、澎湃と立ち昇る黃塵の中を走る型の古い自動車、内地には忘れられかけた人力車裸體で走る車夫、悠々として行くラタダの隙商、露店で埒り浴び乍ら長閑に飲食してゐる無數の支那人、柳腰麗麗の足の小さい支那婦人等到底内地にては想像も及ばざる風景に有之、悠々慢々たる大陸支那の深い人生と哀愁に限りなく心引かれ候、皇軍の奮戦を語る大建築物の殘骸、所々に眞新なる職死者の白き墓標も拜され、上陸下の御聖徳と大御心に生き奉る皇軍に深き感恩の胸にせまり只涙あるのみ、只合掌あるのみに御座候、吾々の赴任せし當別院も去年の今頃は支那人の避難所とした貼紙の今は破れ、アカシヤと大地の快よい微風にゆれてゐるのも佯びしくも感ぜられ候(中略)

支那開教は難中の難にも考へられ候も、東亞永遠の和平こそ皇國の大使命の存するところに候、更に思深惟へば久遠の救者大師尊靈の御尊師惠果和尚に宿縁ひき聖地なれば、使命の重く且つ尊きを喜び、没我奉公利益を大聖大師に仰ぎ、新たに密教の法城を建て、上陸下の御鴻恩に奉答し、下萬民の利生に資せんことを念願にかけ伏して天地に誓ひ奉り居り候(後略)

實君 廣瀬(昭九 專二) 大阪市住吉區北山邊尋常小

學校、住所 住吉區昭和町中五丁目二三、淺岡方

小林 正美君(昭一〇 大法) 北安鐘電業公司より興中公

司電業部に轉勤、住所 當分宛書き山南省濟南電

氣公司與中派遣社員として

木藤 安之君(昭一〇 專二) 大阪鐵工所因島工場(廣

島縣御調郡土生町)

海東 茂雄君(昭一〇 專二) 日本ポリドール販賣會社

大阪支店(西區新町通三丁目)

野崎 進君(昭一〇 專二) 大阪地方專賣局より東京

地方專賣局製造課に轉勤

平尾隆太郎君(昭一二 專二) 大阪鐵道局姫路車電區助

篠原 公生君(昭一二 專二) 小林商事部(京城府古市

町四三)住所京城府吉野一丁目一三二〇七

九門 土藏君(昭一二 大法) 大連稅務署第三種所得稅系

住所 大連市早苗町五一ノ四二、古賀清方

矢野 六郎君(昭一三 專一) 東寶劇場名古屋寶塚劇

場營業部(名古屋市中區廣小路町)住所名古屋市中

昭和區宮戸町四丁目二〇

平澤 農一君(昭一三 專二) 陸軍特務部上海勤務

梅木 美雄君(昭一三 專二) 溫泉タイムス社別府市政

記者、住所 別府市小梅町二三七九、村上忠利方

吉田 重行君(昭一三 專一) 三井生命保險會社大阪支店

島之内部(東區高麗橋二丁目)

馬淵 錦八君(昭一三 專一) 名古屋市中區東大曾根町三

一ノ九

住所移動

萩原 敏隆君(昭三七 法) 兵庫縣武庫郡芦屋申新田七

五六一

徳田 高二君(昭四二 專商) 千葉縣船橋市五日市一八

尾合 藤一君(昭四五 專商) 住吉區丸山通二丁目二五

伊藤 光正君(昭二二 專商) 住吉區田邊東ノ町四ノ三二

奥田 正雄君(昭二三 專商) 神戸市神戸區海岸通二ノ二

秀島 全治君(昭一四 專商) 日濠會館内(電三宮吳九七)

大塚 重延君(昭二 專法) 大連市聖德街一ノ一六七

常名 榮一君(昭二 專經) 神戸市灘區深田町二丁目六

高部 和男君(昭三 專商) 〇ノ五二

澤井吉之助君(昭三 專法) 富山市總曲輪五ノ組

池田 信義君(昭四 專商) 東京市蒲田區安方町一七一

四ノ一 兵庫縣武庫郡鳴尾村鳴尾小

三谷 久男君(昭六 大法) 松里中一ノ一

櫻木 一雄君(昭七 專法) 此花區西島町北港住宅一三

平井 太郎君(昭七 專經) 中河内郡八尾町大信寺四五

淺野 三次君(昭八 大法) 新永永昌胡同第一代用官舎

三橋 正實君(昭九 大法) 二九〇號

犬飼 幸次君(昭一〇 專一) 富山市清水町五〇

中鹽 明男君(昭一〇 專商) 新竹市南門町四ノ二八七

橋高 護君(昭一一 專二) 大連市山縣通五一大同組

堀 敏雄君(昭一二 大法) 北區郡島本通六丁目一七

小林 豊君(昭一二 專一) 豊能郡池田町菅原町

住吉區西今川町四丁目四九

兵庫縣養父郡西谷村橫行

二二六

改姓名

(舊) (新)
(天一五專經) 田淵 昶 木村 昶
(昭九專二) 笹岡 繁敏 金田 繁敏
(昭一〇大法) 多久次郎 渡邊 次郎

逝去

岡本 保誠君(昭二五 法) 昭和十二年二月二十二日
奥谷 詮一君(昭七 專法) 昭和十一年十月十日

英國

詩人啄木を紹介

本學昭和九年經濟學部經濟學科卒業生川並秀雄氏は關西學院中學部教諭として勤務の傍ら、熱心な石川啄木の研究者として知られ、たま／＼啄木の實妹の嫁ぎ先熊本の三浦牧師が今回ケンブリッジ大學留學に際し自由畫界の佛生寺虛明畫伯の歌題畫百餘枚と共に川並氏英譯五十餘詩を合せて英國へ持參、かくして若くして逝ける壽命詩人を紹介する事となつた。

寸土社洋畫展

本學大正十一年專門部商科出身の和田正節氏らによつて成る寸土社の洋畫展は去る五月廿四日より二十九日まで心齋橋筋關西畫廊に催され、和田氏は「白椿」「甲山風景」「岬の巖」「密塚風景」「柴山瀉の朝」の五點出品せられた。

學會消息

千里山經濟學會

吾が經濟學會が在來法科中心の關大學園に目覺し、經濟學部の進出發展と共に一層光彩を添へるものとして其の動向が大いに期待されてゐる。

正井會長先生の献身的な盡力に依つて其基礎期を過ぎ、毎月一回の例會に於ける教授、名士並に學生側の研究發表に討論會の外本年に入つて多年來熱望の每週土曜、原書講讀（第一回英書）學會々報の發行等が企圖され去る五月の例會に於て之が決定をみるに到り着々と先輩會員とも連絡のもとに實行されつゝある事は全會員の熾烈なる關心と經濟學會其のものゝ時代的存在性を痛感するものがある。

商業研究會

第三回社會見學を四月二十三日大阪朝日新聞社にて行ふ。時局重大なる時に直面し我々はニュースに多大の關心を有してゐる折から此の見學を果し得た事は其處に意義深いものがあり、又得る所多大であつた事と思ふ。出席者會員三十三名。第四回社會見學を五月十二日大阪中央放送局にて行ふ。出席者三十七名。

五月十三日我が商業研究會は本年度の新入會員を迎へるに當り、其の歡迎會を心齋橋筋森永キャンデーヌトアにて開催せし處。本會々長森川教授、矢口磯部

の兩教授を始め先輩諸氏並に本會々友會委員長坂本龍夫氏と副委員長太郎良松美氏の列席を得て、此處に盛大なる昭和十三年度の春季總會並に歡迎會を終了し得た事は誠に欣快に耐へない次第である。

扱て過去を振り返つて見るに本會は此の學園にこの聲をあげてより未だ二歳足らずの年月を経過せるものなれども今や學園の文化殿堂として七十餘名と云ふ多數會員を擁し本會の將來に於ける發展性は驚く可きものがあらう。

國文學會總會

國語漢文學會ご改稱

國文學會昭和十三年度總會は六月五日（日）午後一時より天六學舍會議室に於て開催、會長飯田教授、高橋教授、安川助教授、田中講師外會員多數出席、飯田會長より先般教授を辭された前會長新町先生並に藤澤先生の功績を稱へられて本會名譽會員に推舉され、次いで會則一部改正の件を審議して會名國文學會を國語漢文學會と改稱し、會費年額貳圓と満場一致決定、本年度幹事、常任幹事は會長指名に一任、ついで講演會に移り、高橋教授は「清朝の詩人袁枚について」と題して清朝詩壇の大勢、袁枚の詩の特異性、袁枚の詩話、文、小説、哲學、歴史、經學、教育學說、食單並に隨園等について興味深き講演があつた。

講演後茶話會に移り、會誌第一號を來る九月發行する事、京都御所拜觀は十月、七月の見學は文樂座の人形淨瑠璃又は歌舞伎觀賞をなす等隔意なき意見を交換し、午後七時閉會した。

東亞研究會

「光は東より」遠大なる希望と宏遠なる理想の下に本會が我學園に結成されて早くも六年の星霜は流れた。この光輝ある本會を益々躍進せしめるべき重大なる任務をまかされた本會員は一層の奮闘と努力によつてその誇を持続せしめる決心を深めねばならぬ。

戰爭開始以來約十ヶ月、南京、杭州は續々と落ち今又徐州は陥落せり、徐州から漢口へ——又昆明へ何時果つとも知れぬ戦をよく——心にして深い覺悟を必要とする、日本の行動は世界の注目の的なり。我々學生の仲間又數多く出征せし今日只管營業に専念し銃後奉國の誠を致さざるべからず研究會員は今後とも一層の研究と努力を致さんとするものなり。

本年度事業の豫定は決定し四十名の會員の結束は愈々固し、大山、奥平兩先生と幾多有爲なる諸先輩の御指導の下に學生らしく色に染らず純真なる學生として激烈たる若人らしくこの一年の事業に邁進せんことを吾々は誓ふものなり。

新入會を歓迎します。

五月七日午後三時より第三十九教室に於て第四回討論會を行ふ。

- 一、北支の教育並に宗教 井上 清
- 一、北支の資源と其の開發 藤本 喜彦
- 一、ユダヤ人に就いて 矢内原恵一
- 一、國共合作の將來 嘉手川 整

以上諸君は熱辯をふるひ傾聴者間には又猛烈なる討論が行はれ、今回の討論會をば一層意義深きものたるしめた。

修學旅行の記

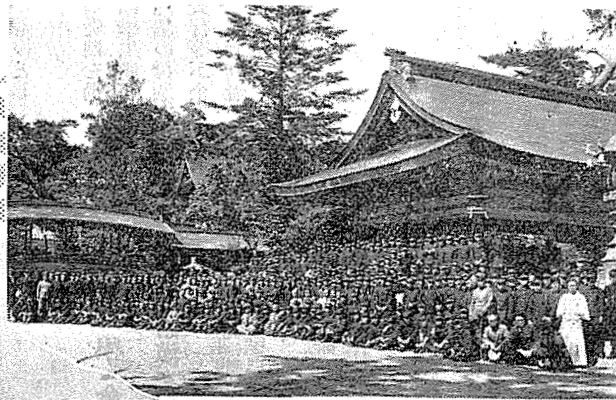
豫科の淡路ゆき

新緑につつまれ淡刺と伸び何かを求めんとする様な季節五月の七日に我等豫科若人は、海一つ隔てた詩の國傳説の島淡路を訪れんとて欣喜として築港大棧橋へ足を早めた。

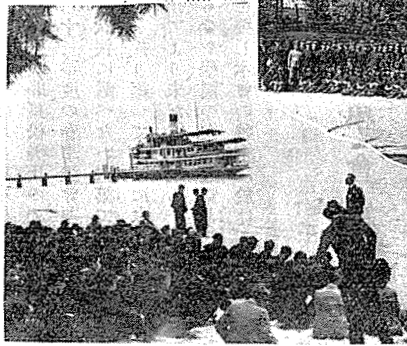
前日來の雨も今朝は餘りなく晴れ渡り懸念された風波もすでに治まり先づ絶好の好條件。海上遙か靄の立ちこめ水平線上空と海と混然一體となり廣く弓形に我々の上迄續いてゐる。あたり總てが靜寂な夜の眠よりそのヴェールを脱ぎ去り生々とした朝の冷氣に抱擁される。この冷氣に包まれた港の朝は我々になにとなくエキゾテイツクな神秘的な或物を感じしめる。しばしの間この靈氣にひたる。船はかすかな弱い汽笛の餘韻を冷い大氣中にふるはせつゝ靜かに靜かに棧橋を離れてゆく。

舷に出て見れば右手遙に翠微たる六甲摩耶の山々、白い波の續いてゐる海岸線煙突の林立する尼崎の家々、しかうして左渺々たる大黒潮の果しなくどこまでも續いてゐる。空も煤煙よりのがれ出て紺青と變り、紺碧の海、翠なす連山。美しき哉自然美。星移り月變れど變らざるは

渺茫たる大自然。見る者異れど見るもの



科豫學大 (上)
部一第部門專 (下)



變らず、人生は是盛衰の歴史、されど自然に盛衰なし歴史なし我々は心ゆく迄この美しさを胸に懷いた。船は須磨を通つてゐる。爛熟せる平安文化の花匂へる五十有四帖の大繪卷、紫が心もて記しなした須磨の一と巻、光源氏の遺瀨なき思ひを込めて眺め明かした淋しき涙も滂沱として聲もなし。今は唯須磨の浦浪の寄せては返し寄せては返しその昔を忍ぶのみ。やが船は左手遙に郡家を見る。白い砂青い松の港郡家へ。

靜かな動きのない田舎町を過ぎ麥の緑穂を樂しみながら行く事敷町にして第一の目的地たる伊弉諾神社へ達す。境内一萬坪の神苑は伊弉那岐命伊弉那美命この地淡路多賀へ御足を止め給ひしより悠久三千年遠

き神代よりの神國日本の象徴を躍如として偲ばせしむる感あり。天を塵すが如き大樹の鬱蒼と茂り超然として轉換期日本の姿を眺め下してゐる。敬虔なる氣持で神前にぬかづき明日の日本に幸あれと心

に於いて當神社の起源歴史に就いての講話を拜聴し次いで拜殿に於ける神樂を見る。世の穢知らぬ巫女の長袖舞かせ古式懐しく舞ひ伏しては地軸權現を把持し立ちては瑞光込むる靈氣を衞む。長袖纏るゝ所惡邪祓ひ裾端ひるがえる所不淨を清む。舞樂始るやあたり一種の靈氣におそはれ一入神々しさを覺ゆ。神苑の崇高にして幽邃舞樂の玄妙にして端嚴、是總て崇ならざるはなし。休憩時間を利用して境内を逍遙參觀し益々その洪大無邊なるを知る。目出度くも皇紀二千六百年佳祝を卜して境内三萬坪に擴張され本殿拜殿等の諸殿も新しく造營せられこれに我が光輝ある二千六百年も更に一段の輝きを増様に思はれる。

再び船より第二の目的地岩屋へ上陸するや代表者一行は車を驅つて皇國の爲名譽ある戦傷を遂られた忠勇なる將兵諸子慰問の爲に陸軍病院へ一足先に訪れる。一方我々は狭い軒の並んで漁師町特有の臭のあるこの町を通り繪島に至る。寄せては砕け、水煙をあげて岩を洗つては又寄せ来る波浪の偉大なる力によつて著しく形を變へてゐる。しかしその變形以外に我々をして誘致嘆賞せしめる何物もさらになし。唯自然の力の偉大さを知るのみ奇岩碧海風光明輝は單なる宣傳か?

豫定の時間より後れて船は岩屋を出航し一路懐しの大阪へと船首を向ける。夕闇せまれる内海の風も、港神戸のきらきらと海面に反映する燈火も又一種の感傷的な旅愁に似た氣持に沈み込む氣がする船は小雨をついて安治川を遡り上り淋物しさうな汽笛を夜霧一ぱいにふるわせながら、やうやくにして十時頃國津橋附近にて錨を下す。かくしてこゝに新入學生歓迎の意義ある愉快なる一日を過したのである。最後にこの感激のいつまでも消えざらむ事を祈りつゝ。

専門部第一部

びわ湖島めぐり

新入生歓迎旅行

五月二十一日、定例の年中一大行事天六學友會の新入生歓迎會——師と學友との交歓を滋賀の琵琶湖にて開く。

午前六時五十分一路濱大津へ、直ちにみどり丸に乗船、九時二十分ドラの音高らかに船は師と學友四百を乗せて靜かに岸壁を離れ針路を舞子へ——
十一時近江舞子に着き一同下船、廣々とした白砂青松の湖邊にて新入生歓迎大會を開く。

開會前皇居遙拜、護國の英靈に對して一分間黙禱し感謝の誠を捧げ、續いて、大郎真副委員長の開會の辭、坂本委員長

の力強い歓迎の挨拶、續いて河村専門部主事、中村生徒主事の挨拶ありて新入生總代高砂君の答辭あり、學歌齊唱後河村専門部主事の發聲にて天六學友會の萬歳を三唱し戰時下の歓迎會らしく閉會、少時あたりを逍遙し、十二時半乗船竹生島に向ふ、船中一同和氣霽々として晝食を濟まし或グループは歌ひ或グループは湖上に移り行く風光を賞でつゝ午後二時竹生島へ着く。各自三々五々西國三十番觀世音堂に參詣都久夫須麻神社に詣で皇室の安泰、皇軍の武運長久を祈り乗船、島を一周して長命寺へ……この頃歓迎會氣分彌々最高調に達し應援團の音頭でます

元氣に大氣勢を擧げる。遙か彼方に塵の如く浮ぶ島、近づくにつれて目につく『誓の御柱』の五ヶ條の御誓文、マリソガールの説明に皆威儀を正して禮拜する。沖の白石の横を通り夕陽ほのかに暮れんとする頃長命寺に着く。八百八の階段に體位向上を呼べ涼風肺腑を襲ふてそこに希望あふれ、青波の彼方に夕日の沈まんとするのを見る、船は早や歸帆の汽笛。

午後六時樂しき極まりし今日この日に名残を惜みつゝ濱大津へと急ぐ、途中堅田にて夕食を配布され、午後八時無事濱大津にと着き直ちに大阪天満へ——午後九時半天満着解散せり。

學友欄

基督教青年會 (千里山)

大阪學生基督教青年會聯盟總會

五月十五日午後二時より大阪YMCA會館にて開催(當番校大阪齒専)本校より大笹、安田、本田、各幹事出席。大阪YMCA主事宮崎忠勝氏より北支皇軍慰問報告談後本年度重要案件を協議した。散會午後六時臨時總會(五月十九日)YMCA會館にて開催

基督者又は基督教に理解ある方は振つて我等と行を共にせられんことを希ふ。

事務所 住吉區住吉町三三〇
本 田 浩 幸方

Y.M.C.A (専門部二部)

五月七日 毎月第一土曜日午後八時より開催の例會を新入生歓迎の意味を兼ねて祈りの準備の中に開く、讚美と祈り、橋詰兄の熱心な立證勸話ありて終り、懇談會に入り新入されたる諸兄をハートでもつて迎へた。主を信する者の一人も多く集はれん事を。

先づ神の國とその義とを求めよ然らばこれらのものは汝らに加へらるべし。

(マタイ六・三三)

關西大學ウリ學友會

昭和八年五月に創立せられた關西大學朝鮮留學生學友會は創立以來會員相互の親睦と智育向上とを計るを綱領として過去に於ては會則の制定及會員名簿を作製する等本會の基礎は今日では確固不動の存在となつた。

去る五月一日には天六學舎に於て定期總會を開き從來の會名を關西大學ウリ學友會と改稱し、會の明朗と強化を計るを前堤として本年度から顧問を推載することを決議し本學出身前京城辨護士會長崔鎮氏、本學教授大山、和田兩先生を顧問に推舉する事に一致し既に諸先生の快諾を得た。

會員は僅に百名を超え、蹴球、庭球、拳闘等繞らゆる部署に過去の經歷を有する選手が多數居る事とて庭球部、蹴球部等は既に猛練習を開始して居り、近き將來に於ては我が學友會よりも世界的選手を出さんものと會員の意氣は正に天を衝かんばかり張切つてゐる。

今や文化的方面に於ても運動方面に於てもウリ學友會の偉容を發揮する日も間近に迫つてゐるを確信す、顧問並に委

關大スポーツ...

關西六大學野球

覇者決定す



連年の覇者を以て任ずる本學今年の成績は不覺にもリーグ開始以來既に神商大並びに同志社更らに關學にも累計三敗し年來の牙城搖ぐかみえたが掉尾の猛打は遂に立命に連勝して首位立命と同率となり昭和十年以來の優勝争ひとなつたが茲に果して傳統の強味頑張りを發揮して最後の榮冠を獲得しうるや誠に興其れ自體として佳境に入るの感あるを覺えたが優勝決定戦に際しても最後迄立命とシューティングゲームを演じて接戦、本學もや引き續き春李の覇者とな

つた。

五月二十一日 一回戦

關學大 5A—2 關大

パツ 關大(宗内、岡本、肥下、宮川)

テリイ 關學(門脇、青池)

五月二十二日 二回戦

關大 4—2 關學大

パツ 關大(肥下、岡本、宮川)

テリイ 關學(門脇、青池)

五月二十八日 一回戦

關大 15—3 立命館大

立命館大 1003210018—115

五月二十九日 二回戦

關大 2—1 立命館大

パツ 關大(肥下、岡本、宮川)

テリイ 立命(岡山、安岡)

優勝決定戦

六月五日 於寝屋川球場

關大 4—3 立命館大

立命館大 000110002—4

パツ 關大(肥下、岡本、宮川)

テリイ 立命(中谷、安岡)

陸上競技部

八連覇の偉業なる

第十八回關西學生對校選手權大會は五月二十八日二十九日兩日に亘り甲子園南運動場に於て舉行、本學傳統の名譽を確保する各選手の熱闘は遂に八年連覇の偉業を成し遂げ、

第一部 優勝

走り跳 ①戸上 ②大室 ④谷口

砲丸投 ①林 ②戸上

走高跳 ④戸上 ⑥大室

百米 ①川手 ②谷口

四百米 ③門田 ⑥古川

四百米繼走 ①關大チーム 43秒5

(川手、鈴木、岩尾、谷口)

二百米 ①谷口 ②川手 ⑤鈴木

八百米 ②門田 ④渡橋

高障礙 ②大室

四百米障礙 ③谷口

千六百米繼走 ②關大チーム

棒高跳 ④安井

三段跳 ①戸上 ②大室

槍投 ①戸上

圓盤投 ③權代 ③大橋

ホツケイ部

關西學生リーグに優勝す

全國的に確實の地歩を占むるホツケイ部は依然好調を示して關西學生リーグに優勝す。

五月十五日 於神商大

關大 4(1—1) 2 京都帝大

五月二十二日 於千里山

關大 12(3—0) 1 神商大

對三高戦は三高棄權し、關大三戦三勝となり優勝す。

水上競技部

京阪神三都學生水上優勝校大會は六月五日甲子園プールにて關學大、關大、立

員は左の通りである。

顧問 大山彦一教授、和田豊二教授、崔

鏡先生

委員長 李雄烈

副委員長 金晉根

委員 李相燦、黃東燦、林本突、方炳鏡

郭慶厚、庭順和、朴賢國、韓炳基

朴鳳鏡、姜千文

一部 辯論部

我が専門部第一部辯論部が學生辯論部の社會的使命を果さんとして、去る六月五日夜、下海老江青年團と共同主催の下に鷺洲第三小學校講堂に於いて開催した學生辯論大會は、正に豫想以上の盛會にして、開會前、續々詰めかけた熱心なる聽衆は間もなく會場に滿ち溢れ、六時半下海老江青年團々長元橋政雄氏の開會の辭に火蓋は切られ、辯士諸君の日頃の抱負、愛國の熱血は火となつて聽衆の胸に燃え、特に本部指導教授川上敬逸氏、天六學友會委員長阪本龍夫君、共濟部長根本大五郎君の挨拶は大會の色彩を一層濃厚ならしめ、屋外にまで溢れた聽衆に多大の感銘を與へ、滿場興奮の坩堝と化した時半下海老江青年團副團長小津傳氏の閉會の辭の後も猶消えやらぬ、興奮を西川部長の音頭にて、天皇陛下萬歲、陸海軍萬歲の三唱に發散して大盛裡會に本大會を終了した。

命大三校の間に熱戦を演じたが結極優勝
豫想の四百米を關學に喰はれ18點の差に
て二位となる。

- 五十米 ③吉田 ⑤圓尾
- 四百米 ②上野 ⑤柴田
- 八百米 ①上野 ⑤柴田
- 百米平泳 ④矢野 ⑥高島
- 五十米背泳 ①中西 ④山村
- 百米背泳 ①中西 ③長谷
- 二百米繼泳 ②關大 1分55秒4
- 八百米繼泳 ②關大 10分36秒2
- ①關學85點 ②關大67點 ③立命45點

庭球部

關西學生春季學校對校試合

五月二十九日 於甲子園コート

關學大 5 (複2-1) 4 關大

日獨交歓庭球 五月卅一日、六月一日

ベルリン・ロート・ワイゼコート

メタクサ 3-6 3-6 倉光

倉光 6-4 6-4 倉光

倉光君奮闘の結果一勝4-1の成績にて
日本側零敗を免る。

全佛選手權大會 六月三日、五日

パリ・ローラン・ギャロスコート

倉光 7-5 6-3 シエーズ

デストレモ 4-6 8-6 (英國)

パトラ 6-1 3-3 倉光

ワイルド 9-11 6-3 中野

(英國) 6-2 倉光

米式蹴球部

五月十五日、西下せる法政大學との試
合を甲子園南運動場に舉行、この日選手
皆よく闘ひ遂に遠來軍をして大敗せしむ

籠球部

對慶應定期戰一勝一敗

東京國民體育館に於て行ふ。

六月四日 一回戰

慶應 56 (326-113) 42 關大

六月五日 二回戰

關大 48 (2028-2817) 45 慶應

卓球部

五月十五日の全關西卓球春季リーグ戰
は最後の戦に長恨を呑む。

一回戰 關大專二 6-1 彦根高商

二回戰 同 5-12 和歌山高商

三回戰 同 5-12 大阪外語

優勝戰 同 3-4 大阪齒專

六月五日の關西學生リーグ春季試合は
大阪商大コートにて舉行、練磨の腕も美

事に諸剛を倒して夫々勝つ。

第一部優勝 關西大學

第二部優勝 關西大學專門部二部

射撃部

第十三回關西學生春季射擊大會は六月
五日大阪城南射場に於て舉行されたが次

の成績にて優勝を逸す。

團體 ①關大 ③關大專門部一部

(個人) ①西田(關大專) ③三宅(關大)

③荒木(關大)

相撲部

第六回關西專門大學選抜對抗大會は六
月五日藤井寺相撲場に舉行。

一回戰 關大 6-1 大高醫

二回戰 立命大 5-12 關大

三回戰 關大 6-1 名高商

四回戰 關大 7-10 京醫大

五回戰 關大 5-12 同志社

六回戰 關學大 6-1 關大

七回戰 關大 6-1 同高商

勝率 第三位 七戰五勝

個人 二回戰勝者 中屋、中屋

同 三回戰勝者 中屋

準決勝 高田(同大) 中屋(關大)

三等決勝 西村(關學) 中屋(關大)

往年全日本學生界に黄金時代を創つた
本學相撲部も爾來在昔十餘年來の拓大西

の關學の擡頭に覇道を阻まれ來つたが前

途ある大松・中屋(此花) 向井(天師)

の入部により見違へるばかりの活氣を呈

するに至つた。黄金時代の再現には未だ

しの感が深いが曙光は今射してゐる大い

に戒心奮ひたつべき好機である。

二部 劍道部

五月十四日、天六本學道場にて好敵大
阪齒科醫專と組む。各組十四人宛出場、

本學先鋒杉本、林と先づ頑張りて勝ち、抜

き中堅上野、竹内、山口と續きて勝ち、

最後に大澤三者を抜き本學不戰四人にて

勝つ。

一部 自動車部

五月十五日、本學姫路間コースを新人
生歡迎併て皇軍將士の武運長久を祈願の

爲、先輩多數を交へてドライブ舉行、終

始一貫して統制ある訓練の下に無事故の

成績を以て歸學した。

使用車 三七年式ブルムスセダン四臺

使用ガソリン 約二六ガロン

距離 一八九軒 參加者 二十一名

記録 本學八時半出發、姫路正午着

姫路一時半發、本學四時半着

一部 弓道部

五月八日、大阪弓道館に於て舉行され

た近畿高專弓道聯盟戰には選手一同の奮

闘効を奏し、優勝戰には東海弓道界の覇

者三重高等農林と顔を合はせて息づまる

様な熱戰の後、一中の差を以て榮ある優

勝をなせり。

弓道部 (千里山)

五月十五日大阪商大に於ける關西學生

弓道聯盟大會二部に出場す。

個人三位 澤田恒一

千里山馬術部

五月二十二日堺金岡練兵場に於ける第

十四回全關西學生馬術大會には、堂々優

勝候補の名に背かず壓倒的大差を以て團

體個人共又々輝く覇業を遂ぐ。

團體連續障礙飛越競技

①關大 ②神戸商大 ③大阪高醫

個人連續障礙飛越競技

①潮 津(關大) ⑤齋 藤(關大)

卷乘リレー ②關大豫科

琴 平 ②關大豫科

校友會會費拂込者氏名

一時拂(五拾圓)

糸島實太郎 角田好太郎 原田鹿太郎 岩崎 卯一
 神戸 正雄 内藤 正剛

昭和十三年度會費

森田耕太郎 池上 正二 杉浦詢太郎 澤田 康治

長尾 勇 渡邊 茂春 堀 正基 鹿島 四郎

中島 友次 正岡 則之 山本 唯一 吉岡吉三郎

片寄武二郎 勝田 經久 大西 勇 三浦 猛男

佐伯 憲三 今井 喜好 友國 定市 佐々木 豊

山村 松廣 田中 久雄 吉川 正一 木下 清

嘉納 保雄 田邊由治郎 齋藤 新八 田村 光嘉

安井 立雄 塚本 勝 濱尾 正義 尾崎 鬼吉

幸田 元治 長谷川敏夫 木村 一雄 西尾 衛一

前田 聽瑞 岡 道固 佐々木惣一 西田 貞雄

三宅富三郎 中場力一 山本 利治 三宅 保

德平 晴海 川涯 莊市 丸野 智 稻井 萬吉

渡邊 能康 伊月 實 小師文一郎 鹿島 新一

白須賀信一 村山 正純 井上 欣助 加藤 照道

山口 春一 藤村 勝朗 松本新二郎 關田 岩喜

辻 義人 出井 巧 大田 雅一 中村彌之助

林 義男 田中 敏夫 宮本 嘉藏 村上龍三郎

松岡 定夫 島田 惠弘 今泉 彌助 辻 實

麻中 信好 金森末太郎 木村 博吉 梶原 薰

渡邊 喜一 古市 憲道 加藤 忠生 菊池 一雄

鶴飼 正之 岡村 猛 井口 清德 岩尾 威德

片木 幸男 和田 鶴藏 深瀬 武 落合 昇

梅木 美雄 角野 秋二 島野 豊吉 中村 正一

宮本 甚右 矢野 六郎 大島 正巳 弓削多義郎

伊藤 隆 朴 燦 時 石原 益郎 山村 明

西坂 利行 原 二郎 中條 慶高 福田 繁芳

緒方 俊介 高島五一郎 遠藤 文岳 野呂 昌利

館 多雄 杉浦 健一 湯岡 力雄 多田 宗一

松井康治郎 中山 一義 長谷川新八 辻 數文

山口 政雄 藤城 勳 石川 昌一 生田 禾苗

藥師寺富美雄 沼尾 哲雄 大槻 昇 佐伯 敏夫

弟子丸 寛 安西 岩重 吉田 泰固 山田 鋼

粉川 雅夫 大月 文吉 奥山 伍郎 深井十三男

永塩 真平 大島 壽男 阪本 正六 西澤 馨

河野 好雄 前田 逸治 大川 吉一 藤井 宣也

田中 次豊 後藤 徹彌 上田 豊彦 富永 祝夫

大上 岩治 住田 秀敏 坂上 芳雄 藤本 浩一

小林國太郎 橋阿熊四郎 丸山 昇造 田岡 隆

中川 政人 山口忠一郎 新井 正夫 楠島 信一

横井 信義 河野 必 山口 靜男 梅田 忠夫

佐澤 寛 石井 昊 藤井 武 輕澤庄次郎

神戸 正夫 沖 正一郎 松本標四郎 兒玉 善吉

藤井 正雄 福居 順一 藤原 寛了 多治見眞孝

中井 繁 神崎傳次郎 小嶋龍太郎 福田 敏夫

頼戸 勇 丹 二良 矢野 國臣 藤本 龜

井芹 哲也 松本 靜史 加藤 清 村田 重吉

藤井梅太郎 山内 敏雄 篠原 公生 稻若 博

小林 房一 馬淵 錦八 大西常次郎 繁益 正二

北本常三郎 佐藤 増吉 川崎齊一郎 池田 榮

井上 勝朗 武田貞之助 末川 博 村松 岩吉

古田吉五郎 鈴木 寛 諏訪富三郎 上道 直夫

一海 景宥 大矢 五朗 關 豊馬 北岡 醇平

木村 健助 森川 太郎 山本美越乃 相澤 秀一

鈴木 周作 宮本 英倫 山崎 直樹 竹田 省

恒藤 恭 小瀧 詮 野崎 進 平尾隆太郎

中塚 竹藏 田中 健三 小堀 登 吉村 種藏

稻葉 正雄 吉田 音松 小林儀三郎 玉井 磨輔

住原 覺 土橋 文雄 小野木 常 徳田 高二

佐伯 三郎 植田 重正 飛田 政繁 大里 泰輔

戸澤 武 中村景太郎 平澤 農一 久田 一榮

武田藏之助 牧 信清 立花 成美 依藤 繁夫

朝田 良一 三瀬 光義 中田 淳一 高谷 幸吉

福田 寧 江 實 清水 兵衛 金 臺 三

村尾 靜明 生島 藤藏 三宅 豊之 三奈木勝平

三隅 正夫 吉田 孝介 上野 義明 浦阪 文一

田那 政高 赤井 定雄 竹林 實之 桂 忠雄

尾崎 信夫 永幡 泰男 神屋敷民藏 安井 章吾

赤羽豊治郎 中尾 謙吉 黒田 覺 松廣 末松

松崎 義盛 谷口 宗一 池田信之助 信原 昭夫

大正十一年六月十五日創刊
 昭和十三年六月十七日印刷
 昭和十三年六月十五日發行
 大坂市東淀川區長柄中二丁目十二番地
 關西大學學報局
 發行所 關西大學學報局
 印刷所 谷口印刷所
 編輯人 神屋敷 民藏

天六學舎 大坂市東淀川區長柄中二丁目
 本館電話 堀川 一〇三九
 支店電話 堀川 一〇三九
 電話 吹田 四一六三
 千里山學舎 大坂市外千里山
 電話 吹田 四一六三

全國百貨店
有名洋品店
ニアリ

優美
肌觸り良シ



製セルロイド入布
アイデアルカラー

姉妹品 銀 アイデアルカラー

大阪 三國セルロイド株式會社

第 十 六 回

關西大學 夏期語學講習會

科目 英語・支那語

(英語科は中等學校卒業程度)
(支那語科は初等)

會期 七月十五日—八月六日

(午後六時より八時まで)

會費 參圓五拾錢(入會金壹圓)

(本學學生(關甲、二商生も)
含む)は入會金を免除す

會場 關西大學天六學舍

師	講	英語科	教授	村上喜貞氏
同	支那語科	教授	水谷揆一氏	
同	支那語科	講師	奧平定世氏	
		講師	有馬健之助氏	

特 典

英語科修了者にして特に
行ふ試験に合格せる者は
明年四月専門部入學試験
の英語試験を免除す

詳細は直接又は返信料を添へ本會へ照會のこと

大 阪 市 東 淀 川 區 長 柄 中 通

關 西 大 學

電 壩 川 一 〇 三 九 〇 一 〇 八 五 〇 一 七 八 〇 番